呪縛の構造－消費者行動について根源的に考える

芹　澤　数　雄*

目　　次

0　はじめに
1　根源的な問いが問われない構造
2　伝統的経済学の方法－目的については問わない
3　自然主義の誤謬－欲望は無条件には肯定されない
4　欲望操作の事実
5　外部性を考慮した消費理論
6　絶対的必要と相対的必要
7　相対的必要が無視された原因を探る
8　一度引かれたレールの上を経済学は走った
9　目的を問わず，手段のみを問題とする社会
10　体制維持－目的については問われない構造
11　相対的必要は満たすに値するか
12　伝統的経済学の目的は誤っている
13　むすびにかえて

0　はじめに

驚くべき科学技術の進歩とそれに伴って可能になった経済発展，そのこと

* 福岡大学経済学部

がこれまでできなかったさまざまなことを可能にしてくれた。私たちの生活は明らかに豊かになり，貧しさゆえの屈辱からは自由になった。科学技術と産業経済の発展は祝福されこそすれ，懐疑の念をもって見られることはない。

自然の支配，物質的豊富，最大多数の最大幸福，妨げるもののない個人の自由の約束は，産業時代が始まって以来の各世代の希望と信念をささえてきた。…私たちは限りない生産，ひいては限りない消費の方向に向かっているということ，技術が私たちを全能にしたということ，科学が私たちを全知にしたということ，私たちは神になりつつあったのだ。自然界を私たちの新しい創造の単なる建築材料として用いることによって，第二の世界を造りだすことのできる至高の存在に。[1]

現実に問題があるとすれば，科学技術，産業経済の発展が十分ではないからだ。生産水準を高め，それによって消費が可能になれば必ず問題は解決する，そう考えられた。

世界屈指の巨大会社の系列に連なるプロパガンダ機関が，私たちに絶えずこう語りかける。消費こそ幸福への道。生活が苦しいのは，政府が市場経済を規制しているからだ。経済のグローバル化は歴史の必然であり，そのおかげで人類は幸せになった，と。[2]

しかし，コーテンはこのような現実世界の進む方向に疑いを抱く。

ところが実際には，これらの主張はすべて，とめどない欲望を正当化し，

---

[1] エーリッヒ・フロム，佐野哲郎訳，生きるということ，紀伊国屋書店，1998，15頁。
[2] デビッド・コーテン，西川潤監訳，グローバル経済という怪物，1997，18頁。

金の力で幻想の世界にぬくぬくと生きる一握りのエリート層による意図的で狡猾な介入が，どれほど人間社会を変えてしまったかを覆い隠すためのでっち上げなのである。[3]

さらに，現実に起こっている経済発展は貧困をも助長するという。

現代の世界は，過剰な豊かさの中で生活する人々と，貧困や隷属や経済不安のために人間らしく生きることさえできない人々に二分されつつある。大会社や投資銀行のトップ，投機家，スポーツ選手，それに有名スターといった人々が何百万ドルもの年収を得る一方で，およそ10億人が，一日一ドル以下の生活を強いられているのだ。アフリカのさいはてでなくても，この格差を見ることはできる。ニューヨーク市の中心部にある私のアパートの近所でも，そんな光景を毎日目にする。運転手つき，バーつき，テレビつきの磨き込まれたリムジンから，優美な衣装をまとった金持ちが降り立って，超高級レストランに入っていく。その傍らの歩道には薄い毛布にくるまったホームレスがうずくまり，寒さに震えながら物乞いをしている。[4]

貧困の発生だけではない。貧困が原因となって経済以外の問題も累積的に増加する。

貧富の差が広がったことによる社会への影響は明らかだ。犯罪や麻薬，離婚，10代の自殺，家庭内暴力が増え，政治難民，経済難民，環境難民も増加している。武力紛争のあり方までもが変わってきた。世界中で，暴力犯罪の件数が増加の一途をたどっている。[5]

---

[3] デビッド・コーテン，西川潤監訳，グローバル経済という怪物，1997，18頁。
[4] デビッド・コーテン，西川潤監訳，グローバル経済という怪物，1997，27頁。

経済問題を解決しようとする努力の中で，新たな経済問題を発生させ，さらに経済問題とは認識されない分野にまでも問題を起こしてしまっている可能性がある。したがって，よりトータルに問題を把握することが重要であり，より根源的な姿勢による取り組みこそが求められる。単なる体制維持，既得権益の確保が前提になっていたら，正しく問題を把握できない。何のための体制維持，既得権益の確保なのか，そこに喜びに溢れた人間がいないとしたら，それは問題を根源的に把握し，解決していることにはならない。

それがもつ矛盾や問題点が絶頂に達し，爆発寸前になっているのが，現代世界を支配している資本主義的文明であり，物質主義的文明であるとするならば，人類の歴史全体，地球史に対する普遍的な検討が，すなわち，われわれがぶちあたっている問題への根源的な理解や検討，批判が，同時に，われわれの現実のその日その日の矛盾や桎梏に対する答えとなりうるであろう。そして，今日の世界全体の文化問題に対する批判の視角や，われわれが今後どのように生きていくべきかに対する基本的な立場を確立することにつながるだろう。[6]

根源的な理解や批判が求められる，すなわち根源的な問いを問うことによってのみ，隠されていた制約が表に現われ出てくる。そのような制約を超えることでしか問題は解決されないだろう。このような制約として固定された分析手法の問題がある。私たちは問題を分析的に捉えなければならないという宿命を背負わされている。すなわち，現実に接して，そこに問題を感じとる。そしてその問題を表現するためには，全体から切り取って来なければならない。切り取らずには問題を表現できないのである。このことは，もともと全

[5] デビッド・コーテン，西川潤監訳，グローバル経済という怪物，1997，27頁。
[6] 金芝河，現代文明の危機と時代精神，岩波書店，1984，５頁。

体のもとにあった問題を，部分に分解して取りだすことを意味する。もし分解する手法があらかじめ決まっているとしてみよう。すなわち，誰もがその分析手法に馴染んでおり，それ以外の分析手法を受け入れることができない集団によって問題が分析されようとしていると想像してみよう。このとき，その分析手法が万能でないかぎり，すべての問題をこの特定の手法で分析することはできない。いわゆるプロクルステスの寝台の問題が発生してしまう。自分の眼鏡にかなったふうに問題を切り刻んでしまっては，その問題は本来の問題ではなくなってしまう。問題の問題たる性格が変質し，認識できなくしてしまう。

ここで前提とされている分析手法とは，個人個人が独立していると想定する分析手法である。その分析手法に問題があると考えるのである。

今日の科学の常識となっていることは，個人の行動のすべての側面がまとまりを示し，そして合理的にであれ，非合理的にであれ，何らかの仕方で相互作用する傾向があるということ，そして制度的なレベルでは同様にあらゆることが他のあらゆることに影響し，そして他のあらゆることから影響されるということである。前後関係のつながり具合が非論理的であることもあり，そして制度間の相互作用が機能的には歯車のかみ合わぬこともあるが，しかし間違いなく相互に作用しあっているのである。われわれはもはや気楽に「経済人」，「政治的人間」，それに「社会的人間」について語ることはできないのであって，錯綜した制度的相互依存の世界の中では，もっぱら経済問題であるとみなされた基本的な経済問題，もっぱら政治問題であるとみなされた基本的な政治問題，あるいは同様に，制度との関連を持つ人為的に仕切られた領域の内側にあるとみなされた都市，家族，あるいはその他の問題をうまく処理したいと願うことは，「もちろん」そして「一般的には」できないと断言することさえ許されるだろう。[7]

伝統的経済学は要素還元論を前提にして成立している。とりわけ，消費理論については消費の外部性は問題の地平から排除されていた。もちろん例外はある。第５節で論ずるヴェブレンの衒示的消費の理論を嚆矢とする，顕示的消費の理論である。しかし，これらの消費における外部性を重視する理論は，経済学の主流派に強い関心をもたれることはなかった。この原因の一つは，衒示的消費には倫理の問題がつきまとい，それを科学をそして価値判断からの中立を標榜する経済学の中で解決することの困難さにある。さらに，その解決が経済学を研究する者にとって不吉な将来を想像させることもその原因であろう。また，ヴェブレンはそれを取り上げはしたものの，それを経済学の伝統の中で育てるだけの方向性を示していたわけではなかった。すなわち，伝統的経済学を批判するだけで，建設的なかたちでこの問題に対処することはなかった。このようなわけで，顕示的消費，消費の外部性は経済学者の主要な研究テーマにはならなかった。しかし，このような流れに身を任せることは，真摯な姿勢で経済学を研究するものとして潔いとはいえないだろう。

このような観点から，消費の問題をこれまでの経済学の伝統を踏み超えたかたちで問うことを試みる。まず第１節では，このような根源的な問いが問われない構造を理解する。この根源的な問いが問われない構造は経済学に限られるのではなく，科学一般に共通することを指摘する。そして，これが現代社会の根底にある自己の喪失に基因することが論じられる。自己を喪失した科学者，経済学者が根源的な問題を問うことは難しい。第２節では，伝統的な経済学が消費者行動にどのように接近していたのかを説明する。そこでは，目的となっていた欲望が必ずしも正当化されないことを示す。欲望が前提とされると，それについて問うことはタブーになってしまう。科学一般で

[7] ロバート・リンド，何のための知識か―危機に立つ社会科学，三一書房，1979，23頁。

起こったこと，すなわち一度レールが引かれてしまうと，それからはずれることは困難になる。これが経済学の分野でも起こったのである。第３節では欲望を無条件に肯定する自然主義の誤謬について考える。第４節では，欲望が操作されるという事実を指摘し，欲望が無条件に肯定されることの問題を確認しておく。第５節では消費の外部性を扱った理論を紹介する。第６節では，絶対的必要と相対的必要について説明する。そして相対的必要が消費の外部性と関わっていることを確認する。第７節では，相対的必要が無視され続けた原因を探る。そこでは，経済学者の失職，厄介な問題の回避，絶対的必要と相対的必要の区別の困難がその原因であることが示される。第８節では経済学が一度引かれたレールの上を走った結果，相対的必要が論じられなかったことに言及する。第９節では，目的に対する手段の適合性が経済学の問題だという前提が，相対的必要のような重要な問題が取りあげられなかった原因であることを論ずる。あらかじめ目的が与えられると，目的の意味にについては問われない。第10節では，体制維持という願望から，相対的必要の重要性が認識されなかったことについて考える。第11節では相対的必要が満たされないこと，第12節では，相対的必要が満たされる価値がないことを主張する。最後に13節では，残された問題を指摘し，今後の研究の方向を示して本稿の締めくくりとする。

１　根源的な問いが問われない構造

われわれは，顕示的消費すなわち消費の外部性の問題が非常に重要な問題であると考えている。いってみればこれまで扱われてきた問題に比べて，より究極の問題，より根源的な問題であると考える。しかしそのような重要な問題であるにもかかわらず，問われなかったという事実がある。そこで，根源的問題がその重要性があるにもかかわらず，問われない構造があるのだと

いう事実を確認しておく必要がある。

私たちは問題を解くとき，あらかじめなんらかの暗黙の前提を受け入れており，その暗黙の前提の中で問題に接近する。しかし，その暗黙の前提が目隠しになって問題を適切に把握できないことが多い。経済学では，経済的な満足の大きさに焦点が当てられており，それが当然であるとされる。そのような問題の立て方が経済学のアプローチなのだという。

経済学者は一定の条件のもとにおける人間一般を観察することによって一応の結論に到達する。その際個々人の心的および精神的な側面を無視するわけではない。むしろその逆である。経済学の研究の比較的狭い用法においても，そこで作用している願望が強く正しい性格を形成することを助けるようなものであるか否かを知ることは，重大な関心事である。また，経済学の比較的広い用法においては，すなわち実際問題にそれを適用しようとする際には，経済学者は他のすべての人々と同じように，人間の究極の目的を関心事としなければならない。また行動に対する同じ強さの刺激であって，したがって同じ経済的な大きさを持つ満足の間の真実の価値の相違を考慮しなければならない。経済的大きさの研究は経済学の出発点に過ぎない。しかしそれは出発点である。[8]

マーシャルは伝統的経済学の始祖ともいうべき存在である。ところが，伝統的な経済学とは異なり，経済的満足の大きさへの関心は出発点であり，同時に人間の究極的な問題に関心をもつ必要をマーシャルは訴えている。しかし GNP 至上主義がその本質を示しているように，伝統的な経済学で前提とされる目的は量的拡大であった。質的な側面について問われると，それは価

[8] アルフレッド・マーシャル，永澤越郎，経済学原理１，岩波ブックサービスセンター，1985，23頁。

格が十分に表現していると答える。所得分配については，成長によって所得水準が高くなれば，その増加した部分を適切に分配すれば解決できる，したがって，成長こそが，国民所得の水準の上昇こそが，すべての問題を片づけることができると考えられた。このような考え方が反映して，確かにGNPの水準は高くなり，いわゆる豊かな社会が実現した。しかし理想とされる豊かな社会からはあまりにも隔たってしまっている。というよりも，かつての生産水準が低い社会にあったよきものが失われてしまったように感じられる。この原因はマーシャルが指摘した，経済的大きさの研究が出発点にすぎないという戒めを軽んじたためである。どうして，われわれは究極的な問題への関心を忘れてしまったのだろうか。この問題を整理しておこう。

われわれの置かれている状況を認識しておく必要がある。われわれの認識は絶対的認識ではない。科学を行っているからといって，それは客観的認識でもないし，絶対的認識であるわけではない。経済学の枠組みに忠実であるからといって，それだけで客観的であるわけではない。しかし，ややもすると科学の客観性を暗黙のうちに前提し，そこにある科学の体系，経済学の体系が客観的真理を示しているかのごとく思い込みがちである。

経済学者も多くの専門家の例に洩れず，経済学は絶対・不変の真理性をもつ科学であり，それには何の前提もないという形而上学的誤りをよくおかしている。その中には，経済法則というものが重力の法則のように，「形而上学」ないし「価値」と無縁であると主張している者さえいる。[9]

われわれは制約された中で問題を扱っているのだということ，これがまず認識されなければならない。経済学の体系が客観的真理の体系でも何でもな

[9] E・F・シューマッハー，小島慶三訳，スモール・イズ・ビューティフル，講談社学術文庫，1986，70頁。

いのである。一定の条件，一定の価値，一定の目的を前提にした上で成立しているのである。そのような制約を受けているにもかかわらず，制約はないと思い込んでいるとする。そうであってみれば，根源的な問題が問われない可能性がそこにはある。それでは，どんな条件がそのような傲慢な思い込みを生むのであろうか。

科学技術の進歩と経済の驚異的発展の結果，われわれは自分たちの力ではどうしようもない組織を造りだしてしまった。ヤスパースによると，われわれは大きな機構の中で扶養されており，その機構の中の歯車として生活するしかないという。

もろもろの発見と発明とは，創出した一生産の新しい基礎を，経営の組織を，最も効果の多い労働をおこなうための方法的処置を，いたるところであらゆるものを用立てるところの貿易と交通を，形式をととのえた法と信頼するにたる警察とによる生活の秩序を，そしてこれらすべてのものを土台にしての諸企業の確実な計算を。そのなかで幾十万の人々が作業していようとも一つの中枢から計画的に管理されるような，そうした経営が組み立てられ，それらの経営がこの遊星の大部分にわたってその腕をひろげている。

この発展は行為の合理化に結びついている。すなわち，本能や傾向にしたがってではなく，知識と計算を基礎にしていろいろの決意がなされるのである。それからまた，この発展は機械化にも結びついている。すなわち，労働はひとつの，いちいちの点にいたるまで計算され，強制的な規則に縛られた行為となり，その行為は従事する個人相互間での交替はあっても，同じ行為でありつづけるのである。以前ならば人間がただ黙って待っていて，事がひとりでに起こるのにまかせていたところを，いまでは人間は前もって考えて，何一つ偶然にゆだねまいとかかっている。それにしても，仕事にかかっている労働者は，広い範囲にわたって，みずからその機械の一部にならざるをえ

ない。

住民大衆は，彼らの現存在を可能ならしめるために彼らがそのなかで歯車として協力しているところの，この巨大な作業機構なしには生活することができない。そのかわり，いまわれわれは，歴史上いまだかつて人間大衆が経験したことがないほどの扶養のされ方をしている。[10]

このような巨大なシステムの中で歯車として生きることは，かつて存在していた共同体とはかけ離れたところで生活することになる。このことは，かつて共同体の中に存在した人間と人間の間にあった自明の結合を見失わせる。すなわち，人間と人間の間にかつて存在した信頼関係がなくなってしまうのである。信頼関係がなくなったところには，深刻な問題が起こる。われわれは客観的世界が存在しているように思い込み，したがって統一したかたちで世界の把握ができると考える。しかし，現実に世界を把握するのは個々の主観である。[11] このことは，他者との間の意見の不一致を必然化する。とりわけ，個々の人間を支える真理に関して他者との間に意見の不一致があったとしたらどうだろう。これは厄介なことになる。もし真理に関して信仰があった場合，そこには衝突が発生するだろう。そこには服従か征服かの闘争だけが残ることになる。また，信仰のない者には逃避と無抵抗というかたちの意味のない結合があるだけだ。

今日までの歴史においては，親密な共同体や制度や普遍的な精神などとして，人間と人間との自明的な結合が存在していたのであります。孤独な人間

---

[10] カール・ヤスパース，飯島宗享訳，現代の精神的状況―ヤスパース選集28―，理想社，1971，51頁。

[11] 芹澤数雄，経済学の客観性と経済学研究の歪み，福岡大学経済学論叢，第47巻第１号。

でさえもなお，彼の孤独においていわばささえられていたのです。ところが今日では，人々はますますお互いを理解しあわなくなってゆき，会っては別れ去り，お互いに無関心であるということ，すなわち忠実さも共同性ももはやけっして疑問なきものでもなければ，信頼できるものでもないということのうちに，崩壊がもっともよく感知されるのであります。

実際的には常に存在していたところのありきたりの状況が，いまや私たちにとって決定的に重大なものになりつつあるのです。その状況というのは，真理に関して他の人々と一致することもあるし，また一致しないこともあるということ，私の信仰は，もしそれを私が確信するならば，それだけに他の信仰と衝突するということ，何らかの限界において，常に一致の望みのない，しかも服従か征服かのどちらかに終わるところの闘争だけが残るかのように思われるということ，逃避と無抵抗が無信仰者をして盲目的に相互に結びあわせるか，あるいは頑固に反抗させあうかどちらかであるということ，などであります。これらすべてはかりそめのことでもなければ，非本質的なことでもないのであります。[12]

信仰を回避した者は，どうでもよいかたちで現実との妥協をはかろうとする。このとき，われわれは統一した自己をもつことはない。

旧来の目標，規範，原理はなおわれわれの心情や「慣習」の中に生きているのに，それらがもはや現実に適合しなくなっていることである。したがって，大部分の人が，決して正しい解答のみつかりもしない問題を問いつづけ，たえづフラストレーション下にある。あるいは，人々は矛盾する答えの中に迷い込んでしまう。すなわち，教室に入るときには「理性」が働き，恋人を

---

[12] カール・ヤスパース，草薙正夫訳，哲学入門，新潮文庫，2001，31頁。

訪ねるときには「感情」が働き，試験勉強のときには「意志力」が働き，葬儀や復活祭の日には，宗教的義務が働くことになる。かかる価値と目標の区分化は，急遽，パーソナリティの統一を破壊することになる。そして内も外も「バラバラ」の人間（the person in pieces)は，すすむべき方向を知らない。[13]

われわれは自己を喪失しており，巨大な組織の中で単なる歯車として生存を許されている。このことは科学を研究する者についても例外ではない。歯車として生きる研究者，自己のない大衆化した科学者は自分の領域の中で，すなわち安全性を保証された分野に問題を探す。このことは自然科学だけではなく，社会科学の分野にも共通する。

さらに困ったことに，貴族科学（物理学）は社会科学や人文学の中にさえ模倣者を生じさせるのである。哲学もまた，科学や宗教から問題を取りださないで，自分自身の内部から取りだし，「魔力で守られた範囲」内の問題に専念するようになってしまった。経済学者も，たとえば私的消費者と公的消費者との間の，また独占市場と自由市場との間の複雑な相互作用―これが西洋の産業世界に特有な社会形態である―を伴う雑多な経済運営についてのあまり端麗でない調査よりも，数学的に洗練された高度な抽象理論により多くの関心をもったのである。[14]

歯車としてしか生き残れない存在であってみれば，共同研究者である仲間

---

[13] ロロ・メイ，小野泰博訳，ロロ・メイ著作集　失われし自我をもとめて，1970，48頁。

[14] ジョン・パスモア，野田又夫／岩坪紹夫訳，科学と反科学，紀伊国屋書店，1981，103頁。

から排除されることは致命的である。このことは，仲間におもねったかたちで問題を見つけざるをえない。

科学者は自分の勤め口を守るために成績をあげねばならない。そこで科学者は，勤勉に研究しさえすれば，一般原理や実験技術や意のままに使える共同研究者の力によって解決できる希望を無理なくもてる問題にだけ関心をもつようになる。クーンが述べているように，「通常科学がきわめて急速に進歩するように見える理由の一つは，ただ通常の能力さえあれば解決できるはずである問題に通常科学研究員たちが集中するからなのである」。もちろん科学者は，自分の所属する特殊な科学者集団以外の人びとにとって関心があり重要であるとの理由だけでその問題を選択しなければならぬ義務に縛られてはいない。実際，もし彼がそのような選択をすれば，共同研究者たちからもはや「仲間」ではないと鼻であしらわれることになりそうである。誰も問いかけていない問いに答えている耳の遠い人間と思われるのは，今度は彼なのである。なぜならこれらの問いは，われわれ集団の内部では問われていないからである。[15]

集団の内部だけで問われている問題に答えようとしている科学者は，外部からはどのように見えるであろうか。

「科学者は浜で小石をあつめている子どものようなものだ」，かれらはつねにおたがいに小石をなげあっている。[16]

---

[15] ジョン・パスモア，野田又夫／岩坪紹夫訳，科学と反科学，紀伊国屋書店，1981，102頁。
[16] R・H・トーニー，浜林正夫／森本義輝訳，ある歴史家の時代批判，未来社，1975，147頁。

仲間内だけで問題を投げ合って，それを相互に解決し，さらに問題を提起して，それがまた投げ返される。そこに新たに解くべき問題が示される。問題は習慣的に解かれるだけである。すなわち，先輩の引いたレールに従ったかたちで問題は提起され，解かれてゆく。一度ひかれたレールがその方向を決める。しかしそのレールは何を根拠に引かれたのかは明らかではない。暗黙の内に用いられた目的論的・規範的分析手法は，仲間内で使われるうちにしだいに慣れ親しまれてくる。やがて，それは仲間内で信望を獲得し，明らかに前提とされるべきものとなる。すなわち，経済学の研究者は「経済学の用語で考える」事を教えられるのである。このことが主として意味することは，経済現象を敏速でかつ正確に特殊な見方で洞察・理解すること，つまり特定の見地から経済現象を観察し，一定の理論的範疇によってそれらを分類する能力を養わなければならないということである。もちろん，実際に選択される視点や範疇は，結局のところ，根底にある認識論的接近に依存している。一旦，伝統的な規範体系の枠の中で考えることに慣れてしまうと，それは「踏みならされた道」が提供されたようなもので，脇道に足を入れたり，外側から体系を検討したりすることが難しくなる。それはちょうどアインシュタインの有名な例を引用すれば，球の表面で二次元の生活を営んでいる生物が，第三次元の存在を考えることが難しいのと同様である。「踏みならされた道」にしたがって，後輩は先輩にしたがう。

科学全体，例えば経済学が，自らが分析すると公言した制度をめぐる個人の行動のダイナミックスについて正確な知識をもたずに，実質的に作り上げられているということである。まさに圧倒的なのが習慣のなせる技であって，例えばつぎつぎやってくる若い科学者は誰もがその先輩達によって定められた公式のパターンに従うのみならず，いくつかの科学は個人レベルの質の高いデータ収集および分析の有効性を軽視すべく，守りの姿勢をかためる傾向

がある。[17]

このようにして，仲間内だけで通用する専門用語でまとめられた科学の体系が成立する。そして，この科学の体系は先輩から後輩へと伝達されるに従って，より強固なものになってくる。その科学の体系は客観的な根拠のもとに成立したわけではない。しかし，一旦走り出してしまうと，その進行を阻むものはない。むしろ，その進行を促進するような要因が数多く存在するのだ。

大部分の人にとって，精神的努力はできれば避けたいものである。あらゆる大組織の特質はここから生じる。すなわち，大企業に仕える人々は既成の信念に強く傾き，それゆえ既成の行為に強く傾く習性がある。また，通常は，組織の方針を受け入れて自己の考えを放棄してしまう人々にこそ報酬が与えられる。このように，自己の考えの放棄は，個々人が組織に受け入れられ，社会が調和を得るために役立つ。つまり，満足せる人々の文化にとって重要であると同時に，社会を調整する役割を果たすのである。組織人間は現状に満足する。こうしたムードがその人の私的生活を支配し，その人の公的態度をも支配する。彼らは民間組織における判断ミス，常軌を逸した行動，無意味な行為をしょっちゅう目にしているから，社会の欠陥を黙認したりそれに無関心になるのも当然である。大企業が興隆するとともに，公共的活動の誤謬に対する満足せる者特有の適応が生まれる。しかもそうした適応は，当人に直接の影響がない問題の場合にとりわけ顕著である。[18]

困難に立ち向かって組織に反抗するよりは，精神的努力を回避して組織の

---

[17] ロバート・リンド，小野修三訳，何のための知識か－危機に立つ社会科学，三一書房，1979，34頁。
[18] Ｊ・Ｋ・ガルブレイス，中村達也訳，満足の文化，新潮社，1993，78頁。

中でうまくやった方がいい。組織の中でトラブルを起こすよりは，組織の中に埋もれ報酬を手にする方がよいと考えるのである。そして，それが一般にやられていることだ。大衆化した科学者はそう考える。さらに，科学者集団におもねるだけではなく，世間一般にもおもねるという。

二十世紀になって，産業界，金融界がニューディール政策に対する反対のムードに満ちていた頃，著名な経済学者達もやはり，ニューディール政策に反対した。彼らは，ニューディール政策が自由市場の原則と対立し，経済の基本的動機を損ない，とりわけ健全な金融と財政を破壊すると考えた。ニューディール政策を認めそれを支持した経済学者は，見解の相違やときには奇矯さのゆえに，大いに軽蔑された。一般的にいえば，ある基本思想が社会的に受容されて初めて，経済学者はそれを是認するために一歩踏み出すのである。[19]

ここには，経済学者のモデルは真理を求めた結果受け入れられたわけではなく，むしろ世間で受け入れられたところではじめて経済学者に受け入れられることが示されている。今日の科学者こそ，大衆人の典型だということになろう。否むしろ，科学こそが科学に携る人間である科学者を大衆にしてしまうのだ。

「しかもそれは，偶然からでもなければ，個々の科学者の個人的欠陥からでもなく，実は科学―文明の根源―そのものが，科学者を自動的に大衆人にかえてしまうからなのである。つまり，科学者を近代の未開人，近代の野蛮人にしてしまうからなのである。[20]

---

[19] Ｊ・Ｋ・ガルブレイス，中村達也訳，満足の文化，新潮社，1993，80頁。
[20] オルテガ・イ・ガセット，神吉敬三訳，大衆の反逆，筑摩書房，1995，155頁。

このようにして，大衆迎合的な科学が成立する。そこには真理への配慮は存在しない。組織におもねり，社会一般におもねる科学体系が成立するのである。そしてこの科学体系は，異端には結束をかためて対抗するのである。

科学は異端に対して同志の結束をかため，伝統的な「教会の外に救いなし」に代えて新しいモットー「わが特殊科学の外に知識なし」を掲げているのだから，科学を教会にたとえたファイヤーベントの考えも十分に納得できるものである。[21]

これでは，伝統的な体系をもつ科学を超越する動きは起きてこない。本来，人間の幸福，人間にとっての真理を目指して出発した学問，科学であったはずである。しかし，科学を組織というかたちの神に祭り上げた科学者集団からは，人間の幸福，人間にとっての真理はどうでもよくなる。マーシャルのいう究極的な問題意識は消えてしまう。そこに成立するのは，人間を忘れた科学である。

おおよそ，社会科学者達は，彼らの各調査研究分野をせっせと耕しながら前進してくうちに，地平線下に「人間」を置き忘れてきてしまった。彼らの大多数は，今日の諸制度の規模とその実力とによって個人が矮小化されていくうちに，まさしく個人をどう扱えばよいか，よく分からなくなってしまった。多くはその視線を個人に注がねばならぬ時に，肩をすぼめ，そして心理学者を見て，ほっと安堵のため息をつき，その場をとりつくろっている。この個別科学による分業の見えざる手が，結局は科学というジグソー・パズルをうまくはめ込んでくれるのを頼りにしているわけである。その他の人たち

[21] ジョン・パスモア，野田又夫／岩坪紹夫訳，科学と反科学，紀伊国屋書店，1981，102頁。

は，資本主義，社会階級，およびそれらと同様のものが持つ内的な目的論を前に，個人のことをすっかり忘れてしまった経済あるいはその他の決定論に陥っている。[22]

人間を忘れた科学に，その存在意義はない。人間を忘れたところに究極的な問題への関心はない。科学技術の進歩，産業経済の発展に伴い，巨大な組織が生れ，その組織の中でわれわれは扶養されざるを得ない。マックスウエーバーのいう鉄の檻の中で生きることから逃れることはできない。そこでは，組織の歯車になった人間が一般的になる。科学者もその例外ではない。組織の中で生きる科学者は仲間内で問われる問題だけ，一度引かれたレールの延長線上にある問題だけを解こうとする。したがって，外部から見るとつまらない問題だけを解いているように見えるくらいだ。しかし，その科学の内部にいる研究者の目には，その状態は異常とは思えない。組織の中で実際問われている問題を扱っているだけである。そして，立派に仕事をしているのだと感じさせる背景がある。このような科学者をオルテガは大衆化した科学者と呼ぶ。仲間が手にしている分析手法で，仲間が関心をもっている問題を，生活のためにただひたすら問う。しかし，高みを求める者，大衆化しない者だけが究極的な問題を問うことができる。

次節では，経済学が前提としている構造を見ていこう。すなわち，その構造を理解することにより，経済学の中に埋め込まれた前提，意識されなかった前提が明らかになる。そのことが，顕示的消費，消費の外部性が問われなかった原因を明らかにしてくれるはずだ。

---

[22] ロバート・リンド，小野修三訳，何のための知識か―危機に立つ社会科学，三一書房，1979，31頁。

2　伝統的経済学の方法－目的については問わない

伝統的な経済学では，経済学の問題をどのように定式化していたのだろう。消費の外部性を正面から問題にしてこなかった原因はどこにあるのだろうか。これらの問題を解くためにも，伝統的な経済学の展開する方向を決めることになったロビンズの考えを示しておこう。

経済学は，所与の諸目的を達成するために諸手段が希少であるということから生ずる，[人間] 行動の側面を取扱うものである。このことの当然の帰結として，経済学は諸目的の間では全く中立的であることとなる。換言すれば，およそいかなる目的にせよ，その達成が希少なる手段に依存するかぎり，それは経済学者の第一の任務と密接な関係をもつこととなる。経済学は目的それ自体を取扱うものではない。経済学は，人間は，定義され理解しうる行動をなす傾向をもつという意味において，目的を持つものと想定し，そしてその目的に向かっての前進が手段の希少性によってどのように制約されているか――この希少な手段の処分がこれらの究極的な価値判断にどのように依存しているか――をたずねるのである。[23]

経済学は稀少性を前提にしたところに成立する。あらかじめ目的があり，その目的を達成する手段について検討するのが経済学である。目的が何であるかについては問わない。したがって，いかなる目的をも研究対象とするのである。このことは目的が良いか悪いかを問うという価値判断にともなう困難を回避できることを意味する。価値判断から自由になったと自負する経済学は，その築きあげた体系が客観的真理であると暗黙のうちに主張する。客

[23] ライオネル・ロビンズ，辻六兵衛訳，経済学の本質と意義，東洋経済新報社，1957，38頁。

観的真理であるから経済学に対する批判はあるはずがない。あったとしても無視すればよい。このようにして，伝統的経済学は稀少性の問題を解くことに専念してきた。ところで，経済学にとっての目的は効用である。効用最大化がその目的である，ないし消費者の欲望であるといってもよい。では，欲望について伝統的な経済学はどう考えていたのだろう。

この慎重な経済学者（サムエルソン）はそうした諸欲求の本性と正当性について判断することを拒否している。大衆は欲望していると感じる，と彼は言う。もしサムエルソンにその点を問いただせば，経済学者はそんなたぐいの疑問を提起する必要はない，という答えがおそらく返ってくるだろう。サムエルソンは社会的事実を物とみなし，経済的行為者たちによって表明された欲求は彼らにとって真実であり，価値判断を下す必要がない客観的所与として取扱う。[24]

まさにロビンズの引いたレールの上を大経済学者サムエルソンは動く。事実として欲望がある。そしてその欲望を満たす手段としての財・サービスは不足している。あとは効率的な生産を実現すればよい。前提となる目的，すなわち欲望については価値判断をせず，客観的所与としてあつかうのである。

人々の欲望がしばしば本能によって，しかも無分別な本能によって決定されることが頻繁にあると認めたからといって，一体それは経済学の原理にいかなる変更を余儀なくさせるというのか。われわれは欲望の起源を説明する必要はない。われわれの仕事は欲望を満たす手段を研究すること，つまり欲望が充足される条件を研究することである…。概していえば，「心理経済学

[24] ロジャー・メイソン，鈴木信雄他訳，顕示的消費の経済学，名古屋大学出版会，2000，146頁。

者」が二十五年にわたって様々な方向から攻撃を加えてきたにもかかわらず，ほとんどの経済学研究者の心のなかには，有罪だという意識が少しも浮かばなかった。[25]

経済学は客観的な学問である。経済学が前提としている欲望を疑う必要があろうか。この欲望に対する問いは誰も問題にしない問いである。誰も問題にしない問いに答えたところで誰も評価してくれない，職業的科学者である経済学者として生き延びることはできない。

しかし，欲望は本当に満たすに値するものだろうかという疑問がある。そこで経済学では，効用というかたちで求めているもの，すなわち欲望を言い換える。そのプロセスの中で生々しい欲望は純粋な効用という生々しさが薄れたものに変化する。

しかしそれでも十分ではない。効用と言い換えたとしてもなんらかの後ろめたさがそこにはある。そこに無差別曲線の理論が採用された背景がある。[26]無差別曲線を使えば，その背後に効用を隠すことができる。ただ単に等しく評価する，これが無差別ということの意味することだ。効用には触れずにすますことができる。効用の背後に隠れた欲望にももちろん触れる必要はない。

確かに効用も欲望も表面からは消えた。しかし，どのように表現しようと，無差別曲線は等効用曲線であり，等しく欲望を満たしているという事実を示

---

[25] ロジャー・メイソン，鈴木信雄他訳，顕示的消費の経済学，名古屋大学出版会，2000，117頁。

[26] さらに効用の可測性という問題もある。効用が測れることを前提にして経済学は展開してきた。ところが効用が測れるかどうかは疑わしい。客観性という衣装を纏うことで，経済学を科学としてきた経済学者にとっては都合が悪い。ここに無差別曲線の理論が採用された背景がある。無差別曲線を使えば，すなわち序数的効用関数を使えば，効用の可測性の問題は回避できる。

していることであることは明らかだ。そこで，消費者行動の理論は展開し，顕示選好の理論となる。その理論からは無差別曲線が等効用曲線が消えてしまう。ただ選択しているという事実だけが残っている。分析の場面からは人間がいなくなってしまう。人間がいるところ，欲望のあるところ，価値の問題，倫理の問題がつきまとう。しかし，人間がいないから，欲望が表面に出てこないから，目的である欲望からは完全に遠ざかることができる。このようにして，価値判断を迫られる欲望の問題を抹殺してしまったのである。人間についての科学でありながら，人間から遠ざかった科学に経済学は成り果てたのである。人間の幸福とか人間の福祉は考慮の外に置かれてしまった。

次に示されているのは，エンデの「モモ」からの引用である。

「わかったかね，かんたんなことなんだよ。つぎからつぎといろんなものを買ってくれば，たいくつなんてしないですむんだ。でもひょっとするときみはこう思うかもしれないね，完全無欠なビビガールにありとあらゆるものがそろってしまう日がくる，そうしたらやっぱりたいくつしてしまうかもしれないって。だがね，その心配はないんだ。ビビガールには，おにあいのなかまがいるんだ」こう言って彼はトランクからもうひとつの人形をとり出しました。それはビビガールとまったくおなじに完全無欠な人形でしたが，ただこっちは若い男でした。灰色の紳士はそれを完全無欠なビビガールとならべて置いて，説明しました。

「これはビビボーイだよ！ この人形にもやっぱり，たくさん，たくさんの付属品がある。そしてもしこれにもあきてしまったら，こんどはまたビビガールの女友だちがいるんだ。その人形にも，彼女だけに合う専用の持ちものがある。ビビボーイにも男の友だちがいて，それがまた男と女の友だちを持っている。どうだ，これでわかっただろう。もうけっしてたいくつするなんてことはいらないんだ。いくらでも新しいものがあるんだから。

それにほしいものなら，考えればまだまだあるはずだよ。」彼はこう話しながら，つぎつぎと人形を自動車のトランクから出してきました。いくら出してもトランクの中身はつきないようです。モモはそれらの品々にぐるりととりかこまれて，あいかわらず身うごきひとつせず，むしろこわいものでも見るように灰色の紳士をながめていました。[27]

これを見ると，欲望は際限もなく生みだされ，しかも本当に満たす必要があるのか疑わざるをえない。ガルブレイスも次のような指摘をしている。

昔の世界では，生産の増加とは，飢えた人にもっと食物を，寒い人にもっと衣服を，家のない人にもっと家屋を与えることを意味したが，今の世界における生産の増加は，いっそう多くの優美な自動車，異国趣味の食事，エロティックな衣類，手の込んだ娯楽などの，あらゆる近代的な，感覚的な，不道徳な，危険な欲望を満足させるものである。しかし，規模が大きくなっても生産自体の重要性は変らないという理屈で，経済理論は，昔の世界で感じられた消費需要充足の緊迫感を今の世界になんとか移しかえたのである。このような欲望とそれを満足させる生産とを弁護する経済理論は通念において無傷の（そして驚くべきほど絶対的とさえいえる）地位を占めているが，それは非論理的で，俗悪で，危険とさえいえるほどのものである。[28]

3　自然主義の誤謬ー欲望は無条件には肯定されない

欲望が無条件に目的とされることについては，古い功利主義の伝統がある。

---

[27] ミヒャエル・エンデ，大島かおり訳，モモ，岩波書店，1999，123頁。
[28] ジョン・ケネス・ガルブレイス，鈴木哲太郎，ゆたかな社会，岩波書店，1990，140頁。

ミルは絶対善を定義して次のように言う。

究極目的の問題は，普通の意味では証明できない。…ある対象が見えることを証明するには，人々が実際にそれを見るほかない。ある音が聞えることを証明するには，人々がその音を聞くほかない。さらに，我々の経験のほかの源泉についても，同じことが言える。同じように，何かが望ましいことを占める証拠は，人々が実際にそれを望んでいるということしかないと，私は思う。[29]

望ましいものは望まれるべきものである。望まれるべきもの，それを望むことができるものと読み替えた。望むことができるとはどう表現できるのだろうか，どうしたら証明できるだろうか。見ることができることを証明するには，見るほかない。聞えることの証明は聞くほかはない。望むことができることの証明は，実際に望んでいることだ。これがミルの証明の仕方である。これに対して，ムアはミルが自然主義の誤謬を犯していると指摘する。

「見える」が「見られうる」を意味するのとはちがって，「望ましい」は「欲求されうる」を意味しはしないのである。望ましいものとは，端的に，欲求されるべきもの，あるいは欲求に値するものを意味する。それはちょうど，憎らしいものが憎まれうるものではなく，憎まれるべきものを意味し，のろわしいものがのろわれるに値するものを意味するのと同じである。そこで，ミルは「望ましい」という語を隠れみのにして，みずからまったく明らかに理解しておくべき他ならぬその観念をひそかに持ち込んだことになる。なるほど，「望ましい」ものとは「欲するのが善いもの」を意味する。しか

[29] Ｊ.Ｓ.ミル，功利主義論，世界の名著，中央公論新社，1979，496頁。

し，このことが理解されると，われわれがそのことについて判断するには何が実際に欲求されるかを吟味するだけでよいということはもはやもっともらしさを失ってしまう。祈祷書が善い欲求ということを語るとき，それはたんに同語反覆にすぎないのか。悪い欲求もまたありうるのではないか。それどころか，ミル自身が「より善く，より高尚な欲求の対象」ということを語っているのをわれわれは知るのであって，それはあたかも，結局のところ欲求されるものが事実上善いのではないかのようであり，しかも欲求される量に比例して善いのではないかのようである。[30]

事実の中に価値を見出すのがミルのやり方であった。事実がそれだけで肯定される，このやり方をムアは自然主義の誤謬と呼んだ。このようなムアの批判にもかかわらず，功利主義の中に自然主義の誤謬は取り入れられたままであった。欲望の絶対肯定である。一番安易な対処の仕方である。これは世間一般で採用されていたやり方だ。経済学者も世間に倣ったのである。世間におもねるのが大衆化した科学者の姿勢である。であってみれば，経済学者も大衆化し，自然主義の誤謬と言われても，それを無視して欲望を前提とするしかない。しかし，多少の心の痛みからだろうか，欲望を表面から隠したのである。知性を標榜する者として，知性とは遠い欲望があることは承知していたのだろう。

経済学では欲望の充足という目的が大前提である。欲望充足の手段が生産物である。手段である生産物が目的である欲望に比較して不足しているから，そこに稀少性の問題が発生する。稀少性の問題は相対的に過剰である欲望を小さくするか，相対的に過少な生産物を大きくするかによって解決される。宗教では前者を，経済学では後者の方法を選択した。大衆におもねった経済

---

[30] G.E.ムア，深谷昭三訳，倫理学原理，東京三和書房，1973，87頁。

学は欲望を肯定したのである。かくして経済学では，生産増大を効率的になす方向でレールが引かれた。生産が増大すれば，欲望充足の手段である生産物は多くなる。それによって満足感は増えるはずである。しかし経済学のやり方では満足は生れないという。

満足を求めない者がいるだろうか？ 誰もが満足を求めているにもかかわらず，私たちの暮らしには，不満が蔓延している。なにを達成しようが，いくらお金をかせごうが，いかに多くの幸運に恵まれようが，十分ではないというのが，現代の悲劇である。一つの欲求を満たすと，かならず次の欲求がついてくる。あなたは高級別荘地に家をもてるかもしれない。世界中のどんな富豪よりもお金をかせげるかもしれない。それでも，満足感はすり抜けていく。[31]

欲望充足の手段をいくら増やしたとしても，そこには満足感はない。次の引用も，消費増大は幸福感を増さなかったことを示している。

この40年間の消費の増大が私たちを以前に比べけっしてより幸福にしなかったという事実が判明している。二つの国民世論調査によれば，「大変幸福である」という回答割合がピークに達したのは1957年である。こうした世論調査は近年まで実施されてきた（1970年と1978年）が，かつてのピークに匹敵する回答割合は見いだせない。1960年代と70年代は，消費が急速に成長した時期であったにもかかわらず，世論調査のうえではかつての幸福感は復活しなかった。以上のように，所有することは必ずしも幸福を創造しないという事実がある。にもかかわらず，私たちは相変わらず消費のメリーゴーランド

[31] ロバート・A.ジョンソン＋ジェリー・M.ルール，菅靖彦＋浦川加代子訳，満たされるということ，青土社，1999，10頁。

に乗っている。[32]

さらに，このような満足感，幸福感と消費，生産の関係はすでにトーニーの時代に明らかであったという。

国民大衆の生活が1750年当時よりはるかに富裕になり，はるかに多様化したということを否定するものではないが，しかしそこにより多くの満足があるということは断固として否定する。わたくしはいくらか確信をもって断言するが，既存の社会秩序がひじょうに多くの知的で尊敬するにたる市民たちによって，不満をもってみられたということが，現代におけるほどひどい時代は，ほとんどなかったであろう。そして道徳上の不満のこの増大は，物質的資源の先例をみない成長と同時におこっているのである。結論はどうなるか。いわゆる「満足すべき社会制度」は物質的環境とはほとんどまったく無関係だということなのだ。後者はそれだけでは前者をもたらすものではない。というのは，このふたつは同じ素材のなかにあるのではないからである。幾百万になるまで一つずつ付け加えていくだけでは良い社会に到達できないのである。社会問題は量の問題ではなくて比例の問題であり，富の量の問題ではなくて，その社会制度の道徳的な正義の問題なのだ。[33]

このように，人間の欲望を正面から扱わず，効用，無差別曲線の理論，顕示選好の理論というかたちで隠し，生産，消費の増大だけで問題を解決しようとしたところに問題がある。同じことであるが，人間の幸福とか満足，充

---

[32] ジュリエット・ショア，森岡孝二監訳，浪費するアメリカ人，岩波書店，2000，161頁。

[33] R・H・トーニー，浜林正夫／森本義輝訳，ある歴史家の時代批判，未来社，1975，53頁。

足感が，ないし絶対善が目的であったのに，それを欲望と読み替え，しかも欲望を隠し，欲望の出所である人間を隠し，無視したところに経済学の問題がある。

4　欲望操作の事実

これまで示されたように，伝統的経済学では欲望は与えられたもの，いちいち検討するものではないと考えられている。

合理的な行動という概念が，倫理的に妥当な行動という概念を意味するかぎり――そしてそれは確かに日常の論議において往々この意味に用いられる――われわれはただちに，かような仮定は全然経済分析にはいらないといってさしつかえない――このことについては後に一層多くのことを述べるであろう。われわれがいま右にみたように，経済分析はウェーバーの意味において没価値的である。それが考慮に入れる価値は個人の価値判断である。個人の価値判断がなにかさらに深い意味において尊重べき価値判断であるか否か，といった問題は経済学の範囲にはいる問題ではない。もし合理性という言葉が，とにかくこの意味をもつものとして解釈さるべきものとすれば，それが表わしている概念は経済分析にはいらないといってさしつかえない。[34]

個人が実際に判断しているからそれでいいではないか，欲望はあるという事実で十分だ，あとはそれを満たす手段の問題だ，これが経済学の立場である。言い換えれば，欲望は神聖にして不可侵なのである。この社会ではこのことが少しもおかしいとは思われないのである。＜お客様は神様である＞が

[34] ライオネル・ロビンズ，辻六兵衛訳，経済学の本質と意義，東洋経済新報社，1957，138頁。

無条件に肯定される。しかし，お客様が操縦されるとしたら，お客様の欲望が操作されるとしたらどうだろう。操作している主体が神聖にして不可侵という性質を備えていたら問題はなかろう。しかし，そんな神聖にして不可侵のような存在があるはずがない。ここでは企業が欲望を操作しているという事実を指摘しておこう。操作された欲望はもはや神聖にして不可侵であるとはいえないだろう。

パッカードによると，企業はさまざまな方法を駆使して人々の欲望を操縦する。次の例は人々の心にある恥ずかしさの感情に訴え，家庭用品を購入させようとする企業の戦略を示している。不満を作りだすこと，すなわちそこにこれまでなかった欲望を作りだすことが，企業にとっては当然のこととされる。

ガス器具業者の会合の席上，この心理的古物化の仕事でずっと先んじている自動車業者に倣おうじゃないかとの要望がだされた。数年間も同じ車をつかうことが恥ずかしいかのように誰にでも感じさせようとしている自動車業者の努力が実例として出された。ガス器具業者にたいしアメリカ色彩傾向研究所長は率直につぎのように述べた。「みなさん，誰でも知っていることですが，“家庭用品は旧くなっても仕えるうちは役にたつ”といった態度をとっている主婦があまりに多すぎます。」また最近多くの製品がいろいろかわる傾向にあることにふれて，つぎのように説明した。「ガス器具の古物化を速めるためには，何といっても，こうした傾向が役立つことは確かです。」

50年代半ばには，すでに心理学者の助言者たちは各種製品の業者たちに「不満を売る商人」になれと主張した。或る広告担当重役は熱心にこう言っている。「わが国を偉大な国たらしめているのは，欲望，欲求の創造であり，旧いもの，時代遅れのものにたいする不満の創造である。」[35]

さらにエスカレートして，人々の精神的苦痛や懐疑一般が操作の対象になる。人々の感情の消極的，否定的側面，すなわち，罪悪感，恐怖，心配，敵意，孤独感などに訴える。これらの感情にしたがって，さまざまな商品を購入することが，これらの消極的，否定的な感情を一時的には抑えることになるだろう。しかし，それはほんの一時的な効果しかない。しかも，否定的な感情から来る精神的苦痛をやわらげるだけで，そこには消費から来る喜びはない。

人々の潜在意識へむけて売り込むにはどうしたらよいかを研究するうちに，マーチャンダイジング担当者たちは，いまひとつの別な領域があることに着目して，その領域を注意深く探究し始めた。その領域とは，人々の精神的苦痛や，人々が，自分自身に対していだく懐疑についての領域である，人々の罪悪感，恐怖，心配，敵意，孤独感，内的緊張をうまく操作できるか否か，それらにうまく対処できるか否かで，何十億弗という商品の売行の相当部分が変わってくるのだ，という結論が，そこから出たのである。[36]

このような戦略は企業によってより効率的にそして大規模に行われる。テレビや学校といった，人々の批判的な力が働かないような場で，会社の利益こそが人間の利益だという幻想が消費者の中に生みつけられる。

現代社会で，文化伝達の中心的役割を果たしているのは，間違いなくテレビだ。その次に重要なのは学校だろう。テレビを完全に支配した会社は，学校にまで手を伸ばそうとしている。単に商品を売りつけ，消費を広めるだけではなく，会社の利益と人間の利益を同一視するような政治文化を生み出そ

---

[35] V・パッカード，林周二訳，隠れた説得者，ダイヤモンド社，1969，25頁。
[36] V・パッカード，林周二訳，隠れた説得者，ダイヤモンド社，1969，64頁。

うとしている。ポール・ホーケンは，「虚像を見せて現実を忘れさせようとするスポンサー会社の利益に奉仕するマスコミが，われわれの心を侵しつつある」という。

その第一歩は，「市場経済では消費者が決定し，市場が応える」という主張だ。売り手と買い手がともに小規模だった時代なら，確かにそれがあてはまっただろう。小規模な売り手には，自分の商品を買わせるために新しい文化を作りだすことなど，とてもできない。しかし，時代は変わった。現代の大会社は，社会全体の価値観を作り変えて画一的な浪費文化を生み出し，人々の消費支出を増やし，自らの政治目標を推進しようとする。そこで必要になるのが，広告，デザイン，マスコミ，市場調査，マーケティング教育といった多種多様な付属サービスだ。そこで，会社の製品を売り込み，会社にとって都合のいい政治的価値観を浸透させることを専門とする人々が，大きな業界を形成するようになった。[37]

企業の中で生き残るには，その企業の製品を売らなければならない。黙って座っていたら，競争相手の製品が買われていくのを見守るだけになってしまう。そうなったら生活ができない。そのような環境の中では，自社製品を売りつける戦略は当然視される。そこに疚しさはない。たとえそれが人々の否定的な感情に訴えたものであっても，すなわち，その商品購入が一時的に精神的苦痛をやわらげるだけのものであっても，そしてもとはといえば存在しなかった否定的感情を生みだしたのが企業の側の宣伝・広告であったとしてもである。

このように企業によって操作される欲望を満たすことにどんな意味があるのかという問題が生ずる。伝統的な経済学では，欲望はあらかじめ与えられ

---

[37] デビッド・コーテン，西川潤監訳，グローバル経済という怪物，1997，188頁。

た目的であり，その与えられた目的を充足する手段との関係を考える。そこでは，欲望は神聖にして不可侵である，問うことは許されない存在である。しかし，ここで示されたように，伝統的な経済学で想定したのとは異なり，人間に内在する欲望というよりも，人間の外側より力を加えられ生み出された欲望であってみれば，無条件で肯定することはできないのは明らかである。

さらに，欲望が人間に内在したもので，それが欲望の対象である商品を一方的に掴み取るという図式が伝統的経済学の想定する図式である。しかし，パッカード達の指摘を待つまでもなく，人間の欲望が人間に内在的なものではなく，人間の外部からの影響を受けるという事実は重大である。いわゆる消費に外部性があるということである。経済学の伝統の中では，この消費の外部性は適切なかたちで取り扱われてはこなかった。そうはいっても消費の外部性が完全にすべての経済学者によって無視されたわけではない。そこで次節では，細々とではあるが取り扱われてきた消費の外部性について整理しておこう。

5　外部性を考慮した消費理論

物事がどのように相互に関連しているかを見るときにこそ，我々は物事に潜んでいる神聖さを敏感に感じるようになる。物事を個々のものとしてしか見ない文明にみられるのは，意味のない達成，浅薄で世俗的な価値観，継ぎはぎ状態の病める社会秩序などである。

我々の相互関係を目に見えるものにする処置をすれば，貴重な教育的・精神的な勤めを果たすことになる。[38]

[38] A・B・シュムークラー，河田富司訳，選択という幻想，青土社，1997，273頁。

まずヴェブレンにしたがって衒示的消費について説明しておこう。伝統的経済学の想定していたのは，人間の必要物が生理的なものに限られるような生産水準の低い経済であった。産業革命の成果が十分浸透して出来上った豊かになった経済では，古典派の想定するような経済人はいない。欲望が社会から孤立しているのではなく，社会との関係で，社会の中にいる他者との関係の中で欲望は形成される。

ヴェブレンは，＜私有財産制度の根底に横たわる動機は見栄である＞という。他人を意識し，自分をよりよく見せようとするという動機が私有財産制度にはあるという。この根底には，生き残りを求めるという人間の根源的な欲求がある。私有財産制では，財産が私有されているので，それぞれが所有している財産で自分の生活を賄わなければならない。公的機関が面倒を見てくれるわけではない。さらに分業化した生産システムの下では，自分の欲求をすべて自分の生産物で賄うことはできない。そこで，他者の欲望を満たすことで，間接的に自己の欲望を満足させる手段を獲得するのだ。そのためには，他者に認めてもらうことが大前提になる。他者からの尊敬をかちえることは，金銭的成功のかたちで実現する。

ひとびとの尊敬をかちえ，そしてそれを保持するためには，たんに富や実力を所有するだけでは十分ではない。富や実力は，これを証拠立てねばならない。というのは，尊敬は証拠があるばあいにだけ払われるからである。そして富の証拠は，たんにそのひとの重要性を他のものに印象づけ，そして，そのひとの重要性についてのかれらの感じを生き生きとした状態におくのに役立つばかりでなく，そのひとの自己満足をつくり上げ，それを維持するうえにも，同じように役立つ。文化の最低段階以外のあらゆる段階で，普通の生まれつきの人間は，「見苦しくない環境」なり，「賤しい役目」からの免除なりによって，慰めをえ，また自尊心をいだく状態におかれる。生活の装飾

品の点でも，日常活動の種類や量の点でも，見苦しくない暮らしの習慣的な標準から，やむをえず逸脱することは，たとえ仲間のものの賞讃なり，非難なりを意識的に考えるかどうかは別としても，自分の人間としての品位にたいする侮辱であると考えられる。[39]

ところで金銭的成功の証拠はどこに見出されるのだろう。

よき名声の基礎となるものは，結局，金銭的実力である。そして，金銭上の実力をしめし，したがってまた，よき名声を獲得し，維持するための手段は，閑暇であり，また衒示的消費である。[40]

金銭的成功は衒示的消費によって示される。ところで，このような衒示的消費は，社会の上流階級だけに限られそうであるが，そうではないとヴェブレンは言う。

社会のいかなる階級でも，もっとも目も当てられぬほどの貧困なものでも，慣習となっている衒示的消費をことごとくやめてしまうことはない。この部類の消費の最後の品目は，直接の必要にせまられたばあいのほかは，それをあきらめることはない。いちばん最後の小さな装身具や，金銭上の体面のいちばん最後の見栄をすてるまでには，ありとあらゆる卑屈や不愉快をしのぶであろう。このような，いっそう高い，精神的な要求をみたすことを，すべてあきらめてしまうほどみじめに，生理的欲望の圧迫の前に屈服してしまった階級なり国なりは，ひとつもない。[41]

---

[39] ヴェブレン，小原敬士訳，有閑階級の理論，岩波書店，1999，42頁。
[40] ヴェブレン，小原敬士訳，有閑階級の理論，岩波書店，1999，85頁。
[41] ヴェブレン，小原敬士訳，有閑階級の理論，岩波書店，1999，85頁。

このように衒示的消費は，豊かな国の豊かな階級だけではなく，豊かな国の貧しい階級にも，歴史上存在したいかなる国にも観察される現象である。さらに，産業経済が発展し，農村が都市化されるにしたがって，このような衒示的消費はエスカレートしてゆく。

都市の住民はお互いに他人を追い越そうと競争して，かれらの衒示的消費の正常の標準をますます高い点につりあげ，その結果として，その都市の一定の程度の金銭上の体面を示すためには，この方面の，相対的にますます大きな支出が必要となる。このような，いっそう高い因習的な標準に合致するという要求が至上命令となる。見苦しくない生活の標準が，どの階級にとってもますます高くなる。そして，身分を失わないためには，このような見苦しくない体面の要求をまもらねばならないのである。[42]

このような衒示的消費は，個人のレベルでは無駄なことではない。いわゆる合理的な根拠があってなされる消費である。ところが，社会レベルで見ると，そこには意味のない消費，浪費というレッテルが貼られることになる。

浪費について一般におこなわれる非難は，普通の人は，平安に暮らすためには，あらゆる人間の労働や，人間の楽しみのなかに，全体の生活や福祉の増進をみることができなければならない，ということがいいたいのである。あらゆる経済的事実は，無条件の承認をうけるためには，非個人的効用——一般人類の立場からみた効用——の試金石によって是認されねばならない。他のものと比較しての，ある個人の相対的ないしは競争的な利益は，経済的良心を満足させるものではない。だから，競争的な費消は，このような良心

[42] ヴェブレン，小原敬士訳，有閑階級の理論，岩波書店，1999，88頁。

の承認をうけないのである。…慣習的な支出は，それが立脚している慣習が，差別的な金銭的比較から発するものであるかぎり――それは，このような金銭的な名声，ないしは相対的な経済的成功の原理の背景がなくては，慣習的で拘束的なものとなることができなかったはずである，と考えられるかぎり――浪費という部類のもとに分類されねばならない。[43]

衒示的消費は豊かな社会にだけ特有の問題ではない。初歩的な生理的欲求が満たされるやいなや，そこに待ちかまえているのは衒示的消費，浪費の問題になる。

見栄をきそう性向は，自己保全の本能を別にすれば，おそらく，本来の経済的諸動機のうちで，もっともつよく，また，もっとも鋭敏で長続きするものであろう。産業社会では，このような見栄をきそう性向は，金銭上の見栄となってあらわれてくる。そして，このことは，現在の西欧文明国にかんするかぎり，それがある種の衒示的浪費の形をとってあらわれるというのと，結局同じことである。それゆえに，もっとも初歩的な生理的欲望がみたされた暁には，衒示的浪費の必要が，その社会の産業的効率や，財貨生産高のあらゆる増加を吸収しようと待ちかまえている。[44]

近代社会において衒示的消費がなされる理由は，単に他者より優越したいという欲求から発するわけではない。むしろ，慣習的な体面を維持したいという消極的願望であるという。また，一旦増加してしまった消費はすぐに慣れてしまい，かつて高い基準であったものがそうではないように思われてくる。このことは，消費を元の水準に減少させることをことのほか難しくさせ

[43] ヴェブレン，小原敬士訳，有閑階級の理論，岩波書店，1999，99頁。
[44] ヴェブレン，小原敬士訳，有閑階級の理論，岩波書店，1999，109頁。

る。これに反して，先へ進むことは容易になされる，というよりは先へ進まざるをえない状況に置かれている。

職業的，社会的破滅は一つの重要な動機である。…今日のような中流階級であることが多くの人にとってあまり満足できるものでなくなり，またその社会的概念自体が，絶滅危惧種であるかのような世の中にあっては，地位を確保するということはつまり，上昇しつづけることを意味するのである。しかし，誰もがそうし始めれば，階級の上昇は単に遅れずについていくということでしかない。たとえ高いところを目指しているときでさえ，私たちの比較には，強力な防衛的要素がある。私たちは人に遅れをとりたくないし，自分で切り開いた地位を失いたくはない。また，「間違った」ライフスタイルの集団には入れられたくない。私たちのお金の遣い方は，自己のイメージ，アイデンティティ，社会的ネットワークのきわめて重要な部分を構成するようになったのである。[45]

とりわけ上昇志向の強い社会においては，自然と上の階級を意識した消費にならざるをえない。

ひとたび採用した支出の規模から後退することは，慣習化した支出の規模を，富の獲得に応じて拡大することよりも，ずっとむつかしいことである。慣習となっている多くの支出項目は，よく考えてみると，ほとんどまったく無駄なものであることがわかってくるし，したがって，それらのものは虚栄的なものにすぎないが，しかし，ひとたびそれらのものが見苦しくない消費の規模のなかに織り込まれ，そして，そのひとの生活様式の不可欠の部分となってしま

[45] ジュリエット・ショア，森岡孝二監訳，浪費するアメリカ人，岩波書店，2000，152頁。

うと，それらのものを断念することは，あたかも，直接にそのひとの肉体的快楽にかかわる多くの費目なり，あるいはまた生命や健康にとって必要であるかもしれないようなものを断念するのとまったく同じように，むつかしいこととなる。つまり，精神的な幸福をあたえる際立って無駄で虚栄的な支出は，肉体的幸福とか生存の「下賤な」欲望だけに役立つような支出の多くのものよりも，ずっと不可欠なものとなるかもしれないのである。「高い」生活程度から後退することは，すでに比較的低い生活程度をいっそう引き下げることと，まさに同じくらい困難であることは，周知の通りである。もっとも，前のばあいには，その困難は道徳的なものであるが，後のばあいには，それは，生活の肉体的快楽からの大きな控除をともなうかもしれない。

しかし，後戻りすることはむつかしいけれども，衒示的支出について新たに先へすすむことは，わりあいにやさしい。実際，それはほとんど当然のことのようにおこってくる。そのようなことはめったにないことであるが，もしもある人が，消費をふやす方法がありながら，目に見えて消費をふやすことをしないばあいには，それは一般のひとの目からみると，説明がいることのように考えられ，この点で足りないところがあるひとには，けちという卑しむべき動機がおしつけられる。これに反して，その刺激に直ちに反応することは，正常な結果としてうけいれられる。このことは，多くの場合，われわれの努力の指導となるような支出の標準は，すでになしとげられた平凡で普通な支出ではなく，われわれがちょっと手が届かないような消費，または，それに達するためには，なにかの無理をしなければならないような消費の理想である，ということを意味する。その動機は見栄を競うこと―われわれが，自分たちをそれと同じ部類と考える習慣となっているひとたちを追い越そうという気持をおこさせる差別的な比較の刺激―である。つぎのような，しばしばいわれている言葉のなかにも，実質的に同じ命題が言い表わされている。それぞれの階級は，社会的階梯でつぎの上位に位する階級を羨み，またそれ

と見栄を競うけれども，自分以下の階級，もしくはずっと先へ進んでいる階級に自分を比べてみることはめったにない。つまり，言葉をかえていえば，われわれの金銭支出での世間的体面の標準は，見栄の他の目的と同じように，名声の点でわれわれのつぎの上位に位するものの習慣によって定められる。このようにして，最後には，ことに，階級の区別がなんとなくはっきりしない社会では，名声や世間的体面の基準なり，消費の標準なりは，すべて目に見えない等級によって，最高の社会的金銭的階級―富裕な有閑階級―の慣習や思考習慣にさかのぼるのである。[46]

次に，ハーシュにしたがって地位財について説明しよう。地位財とは，他の人と比較して高い地位に位置することにより消費が可能となる財のことである。

伝統的な経済学では次のような想定をする。経済主体が欲望を抱いている，その欲望の先に製品がある。生産水準の上昇が欲望を可能にする。それで目出度し，目出度しというのが伝統的経済学の結末である。しかし，ハーシュによると，財によってはこのような単純な構造にはなっていない。個人の需要を満たす過程で，同じ需要を持っている他の人々の置かれている状況を変えてしまう。そこにあるのは確かに個人，個人の需要である。しかし，社会全体としてみると，多くの需要があるので，それは個々人の直面する状況を変えてしまうのだ。すなわち，個人が直面している取り引き条件を変えてしまうことになる。

個々別々に考えれば，有利な就職のための教育，自動車，山荘等にたいする個人の需要は，その人の置かれた状況での，その人自身の選好による純粋

[46] ヴェブレン，小原敬士訳，有閑階級の理論，岩波書店，1999，103頁。

な個人の欲求といえる。各個人は，独自に行動して，自分の立場を最善にしようとする。ところが，これらの個々人の選好を満たすことそれ自体が，同様の欲求を満たそうとしている他の人々の直面する事態を変えてしまうのだ。この種の個人的な欲求をやみくもに満たそうとする一連の取引が行われると，各個人は取引を企てた当初に想定したよりも悪い取引条件のもとに置かれる。というのは，このような行為の総計は，それに応じた形で関係個人全員の立場を改善することにはならないからである。そこにはいわゆる加算問題があるのだ。経済的進歩の機会は，ひとりの人から他の人へとつぎつぎに現出するが，そのことは，すべての人にとり経済的向上の機会が同じようにあるということを意味しはしない。われわれのうちの誰かにとって達成可能なことを，すべての人が達成することはできないのである。[47]

生産水準が上昇してくると絶対的必要が満たされる。そこでは生理的欲求は満たされるが，他者の存在を介した欲求が発生することになる。いわゆる相対的必要といわれるもので，自動車，別荘などの奢侈財に対する需要である。これらの財については誰もが手に入れることができるわけではない。自動車でも別荘でも生産水準が高くなり，それらを購入するだけの所得が得られれば手に入ると思われるかも知れない。しかし，それは幻想である。ここで論じられている財は地位財といわれているものである。これらの財は，地位ないし順位に強く関連している。自動車に対する需要と言っても，単に自動車のもっている機能に対するものではない。他に優越する財を保有することに対する需要である。このことより，問題は順位だということがわかる。そして，順位については誰もが一番というわけにはいかないのは明らかだ。すなわち，地位財についてはいくら豊かになってもそれをすべての人が消費

[47] フレッド・ハーシュ，都留重人監訳，成長の社会的限界，日本経済新聞社，1980，12頁。

するわけにはいかないのである。

さらに，次のような困難な問題がある。生産水準が上昇し，それに伴って地位財に対する需要が発生する。そこで，個人の力でその地位財を獲得しようとする。ところが，そのような努力を皆がするとしたらどうであろう。そこには混雑が発生することになる。皆が自動車を持ったとする。道路に比べて自動車の数が多くなるだろう。そうなると，自動車が少なかった時と比べて，自動車のもつことの利便性は薄れてくる。この場合には地位がいくら高くても，かつての自動車が持っていた特質を持つような自動車は存在しなくなる。結局，皆が欲しがったために，かつて存在していた地位財そのものが無くなってしまったのである。したがって，需要が増大する前に消費できた人々のみがその地位財を消費できたのである。

次にガルブレイスにしたがって依存効果について説明する。ガルブレイスは欲望が生産に依存するという事実をあからさまに指摘する。

社会がゆたかになるにつれて，欲望を満足させる過程が同時に欲望をつくり出していく程度がしだいに大きくなる。これが受動的に行われることもある。すなわち，生産の増大に対応する消費の増大，示唆や見栄を通じて欲望をつくり出すように作用する。高い水準が達成されるとともに期待も大きくなる。あるいはまた，生産者が積極的に，宣伝や販売術によって欲望をつくり出そうとすることもある。このようにして欲望は生産に依存するようになる。専門的な用語で表現すれば，全般的な生産水準が低い場含よりも高い場含のほうが福祉はより大きい，という仮定はもはや妥当しない。どちらの場合も同じなのかもしれない。高水準の生産は，欲望造出の水準が高く，欲望充足の程度が高いというだけのことである。[48]

---

[48] ジョン・ケネス・ガルブレイス，鈴木哲太郎訳，ゆたかな社会，岩波書店，1990，157頁。

生産の増大が見栄などを通じて自動的に欲望を増大させる。または企業によって広告，宣伝などの手段を使って積極的に欲望を増大させる。いずれにせよ，欲望が生産に依存する。これを依存効果とガルブレイスは呼ぶ。まさに消費者の欲望が独立して存在するのではなく，外部から，ここでは企業の宣伝・広告によって膨れ上がるのである。

次に，デューゼンベリーにしたがってデモンストレーション効果について考えてみる。デューゼンベリーによると，消費者の欲望はそれ自体で完結しているわけではない。優れた財を見るとそれに刺激され，欲望が生みだされ，消費増大を起こす。

どのような世帯についても，優秀財との接触の頻度は，主として他の世帯の消費支出の増加とともに増すであろう。こうした場合が起きると，支出増加への衝動はその頻度を増し，これに対する抵抗力は及ばなくなるであろう。その結果，貯蓄を犠牲にして支出が増加されるであろう。

われわれはこれを示威的効果（demonstration effect)と呼んでよかろう。人々は，いかなる目的のためにも質の良い財を消費することが望ましく，且つ大切であると信じている。人々が慣習的に一組の財を使用している場合，他の諸財の優越性の示威によって，従来の財に満足することができなくなる。しかし単に優等財があることを知っているだけでは，それは非常に有効な慣習破壊者とはならない。そうなるのは，優等財としばしば接触する場合であろう。この分野では，「君の知らないものは君をそこなわない」ということが真理であるばかりでなく，君の知っているものこそが君をそこなう，ということもまた真理である。[49]

---

[49] ジェームズ・デューゼンベリー，大熊一郎訳，所得・貯蓄・消費者行為の理論，巌松堂出版，1969，41頁。

このように，優秀な財との頻繁な接触は消費増大をもたらすが，これを示威的効果と呼んだ。ところで，このモデルの背景にある＜質の良い財を消費することが望ましい＞と信じられているのはどうしてだろう。

なんらかの目的の達成が，一般に認められた社会的目的となる場合，この目的の達成の重要性は，社会化の過程によってあらゆる個々人の心に浸透する。精神分析学的用語でいえば，その目的は自我的理想に合体するのである。こういう事態が生ずると，その目的達成について或る程度の成功を得ることは，自尊心を維持するために必須となる。自尊心の維持は，あらゆる個々人における根本的衝動である。実際，心理的問題には，一方には自尊心の要求，たとえば或る目的の達成とか或る禁制の維持とかと，他方には何か他の衝動の要求との間の矛盾を含むものが多い。われわれは，自尊心維持の衝動があることを問題とする必要はなく，ただその衝動が要求する活動の種類を問題にしさえすればよい。生活水準の改善が，消費する財の質の改善と同じものであることは，かなり明瞭なことと思われる。生活水準の改善が社会目的である社会では，自尊心維持の衝動は，質のより良い財を得ようとする衝動となるであろう。この衝動は，他の見地からこれらの財を得たいと思う欲望とは，全く独立に作用し得るものである。[50]

社会的に認められた目的があると，その目的を達成することは自尊心の維持のためには必要なこととなる。そこで，生活水準の改善が社会的目的である場合，質の良い財を獲得することは自尊心維持のために当然のこととなる。言い換えると，示威効果が生ずる背景には，人々の自尊心の維持がある。それでは，そのような示威効果が強く働くのはどういう環境であろうか。

---

[50] ジェームズ・デューゼンベリー，大熊一郎訳，所得・貯蓄・消費者行為の理論，巌松堂出版，1969，43頁。

われわれの社会では，高度の社会的可動性が可能であるから，高消費水準への衝動にはさらに力が加わる。身分の判定基準が家柄で示される社会では，個人がその身分を高めることは不可能である。したがって，高い身分を獲得する手段としての，高い消費水準達成への衝動は鈍らされる。

さらに，われわれの社会は階級に分かれていない。すなわち，われわれの社会は，相異なる身分の個々人間の連帯に対し，なんら強力な障害となるものをもっていない。このことは，一個人が自分の生活水準の質と他人のそれとの比較から羨望を感じ得る頻度が非常に増加していること，を意味する。もちろん，その定義から大体わかるように，社会的身分の存在は，各個人がほとんど同じ身分の他の個人と交際する傾向にあることを意味している。しかし，われわれの社会の社会的身分の順位は，一連のはっきり区別できる階層順位ではなく，むしろ連続的系列をなしているから，各個人は自分より身分のより高いか，より低い人々とも交際しなければならない。それから社会目的上必然的に，各個人は自分の生活水準を，自分より身分的地位の高いか低いかする交際者の生活水準と比較する。このような比較の結果が自分に好ましくない都度，生活水準の質を向上させる財貨を買って，好ましくない比較を除去しようという衝動が生じるのである。

そこで，高い生活水準というわれわれの社会目的は，自尊心に対しての衝動を優等財獲得の衝動に変換する。社会的可動の可能性と社会目的としての向上性の認識とは，自尊心に対しての衝動を高い社会的身分への欲望に変換する。しかし，高い社会的身分は高い消費水準の維持を必要とするから，この衝動はさらに優等財獲得の衝動に変換される。いずれの場合についても，その衝動は，生活水準の比較が好ましくなかったことから生じる劣等感を通して作用する。[51]

---

[51] ジェームズ・デューゼンベリー，大熊一郎訳，所得・貯蓄・消費者行為の理論，巌松堂出版，1969，46頁。

このように，背景に上昇志向があれば，可動的社会，階級に分かれていない社会では，示威的効果は強く働くことになる。

6　絶対的必要と相対的必要

社会科学者は，非社会科学者を通常悩ますことのない問題に直面しています。それは，彼自身が，自らの研究対象としている領域の一部分である，ということです。天体それ自体が天文学者によって動かされている場合には，あるいは天体の動きが天文学者の予測に基づいて気分屋の天使達によって導かれている場合ですら，天文学者は，経済学者とまったく同様の苦境に陥っていることに気がつくことでしょう。細菌を観察するためにそれを染色してやる必要のある細菌学者は，もしも細菌が見つめられると赤くなってしまうとすれば，いっそう困った事態におかれることでしょう。もちろん，当節のような相対論の時代には，天文学者といえども観測者のもつ困難からまぬがれえないように思われますが，社会科学の場合には，この種の困難は，われわれが光速に近づくずっと以前から大きくなってくるのです。観測領域からまったく切り離された冷静で客観的な観測者，という実証主義的な虚構のばかばかしさは，社会科学にいたってその頂点に達します。とはいえ，社会科学とそのほかの諸科学との間の相異は，たんに程度の問題に過ぎません。非社会科学が観測者の困難にまきこまれることがますます多くなるにつれて，社会科学の結果ばかりでなくその方法もまた，他の分野の科学者の関心をひくようになるかもしれないのです。[52]

このように明らかなことであるが，客観的な科学は存在しない。しかし，

---

[52] ケネス・ボールディング，公文俊平訳，経済学を超えて，学研，1975，６頁。

このことは理解されにくい。ということは，顕示的消費，消費の外部性が多くの人々にとって重要であっても，経済学の中で取り扱われない可能性は十分あるという事である。経済学が分析の対象とする問題は，経済学者が現実の中から選択してくるものである。客観的に問われるべき問題が存在して，それを価値判断から中立な経済学者が分析するのではない。価値判断に塗れた，大衆化した経済学者が現実から選択する問題である。そうであってみれば，真に問われるべき問題が問われず，どうでもよい問題が問われることになる。したがって，顕示的消費，消費の外部性の問題が問われない可能性はあるのだ。

欲求には個人の内部すなわち生理的な側面から発生するものと，個人の外からすなわち他人から影響を受けて発生するものがある。伝統的な経済学ではこの区別をしないで，あらかじめ生理的な欲求だけを取りだしてしまい，それだけを分析の対象にしていた。社会が貧しく，欲望が生理的なものに限られる状況では，そのような分析も正当化される。しかし，社会が豊かになり，生理的欲求が満たされた社会において，これまでと同じ分析対象だけを取り上げることは許されない。欲望が生理的なものだけではないことは古くから認識されていた。

ホッブズその他十七世紀の人々と同じようにスミスが人間の基本的な関心事と見なしているのは，名誉，威厳，尊敬および表彰への渇望である。ただホッブズは後述するように，このような渇望を「必需品に対する関心」とは区別していた。ルソーはもっと明瞭に，有限な物を獲得することで私たちの「真の必要」を満たそうとする自愛心と，同胞からの承認と賞讃と結びつき，性質上無限である利己心との間に根本的で有名な区別を行っている。したがって彼はこう言う。「すぐにわかることだが，私たちの労苦はすべてたった二つの目的に向けられている。その一つは自分自身の生活用品のため，そして

もう一つは他人に対する顧慮のためである。」[53]

このように，すでにルソーによって相対的必要の存在は知られていた。また，マーシャルも目立つことに対する願望，そこから生れてくる相対的必要についての認識があった。

「変化に対する願望は強いが，目立つことに対する願望に比べれば弱い。目立つことに対する願望はその普遍性と持続性を考えるならば，さらに，あらゆる人間のあらゆる年代に作用し，ゆりかごの時代から始まり，墓場に入るまで消えることがないことを考えるならば，人間の情熱のなかで最も強力なものであると宣言してよいかも知れない」と。[54]

マーシャルの弟子であるケインズも必要が絶対的必要だけでなく，相対的な必要もあることを知っていた。そして，相対的必要は絶対的必要とは異なり，飽くことを知らぬものだという。これに対して，絶対的必要はそうではなく，近い将来に十分満たされるようになるだろうという。

たしかに人間の必要は飽くことを知らないように見える。しかしその必要は，二つの種類に分かれる—われわれが仲間の人間の状態の如何にかかわらず感じるという意味で，絶対的な必要（absolute needs）と，その充足によって仲間たちの上に立ち，優越感を与えられる場合にかぎって感じるという意味での相対的な必要（relative needs），この二つである。第二の種類の必要，すな

---

[53] アルバート・ハーシュマン，佐々木毅他訳，情念の政治経済学，法政大学出版局，1985，109頁。
[54] アルフレッド・マーシャル，永澤越郎訳，経済学原理１，岩波ブックサービスセンター，1985，125頁。

わち優越の欲求を充たすような必要は，実際に飽くことを知らぬものであろう。なぜならば，全般の水準が高まれば高まるほど，この類の必要はなおいっそう高くなるからである。しかしこのことは，絶対的な必要については当てはまらない―この種の必要が十分満たされたため，われわれが非経済的な目的にたいしてよりいっそうの精力をささげる道を選ぶに至るような時点が，おそらくわれわれの誰もが気づくよりもずっと早く到来するであろう。[55]

7　相対的必要が無視された原因を探る

＜経済学者の失職＞

経済学の中では相対的必要の存在は認識されていたが，その重要性が無視された原因を考えてみよう。もちろん，いまだ貧しくて絶対的必要が重要であるなら，相対的必要が注目されるはずがない。

生産の問題が――それは過去においては問題であったが――原理的には解決されているということは，ほとんど疑う余地がない。ここに，人間は史上で初めて，全人類の一体化という観念と，人間のための自然の征服という観念とを，もはや夢ならぬ現実の可能性として，認めることができるのである。人間が誇りを持ち，自己自身と人類の将来とに自信を持つのは正当ではないであろうか？[56]

このように，現実に豊かな社会にわれわれは生活していると考えてよい。したがって，相対的必要，顕示的消費の問題が現実の問題になっていること

[55] J・M・ケインズ，宮崎義一訳，我が孫たちの経済的可能性，ケインズ全集９，東洋経済，1971，393頁。
[56] エーリッヒ・フロム，谷口他訳，人間における自由，東京創元社，1997，20頁。

は確かである。にもかかわらず，それが認識されないのは，経済学者がその事実を避けているのではないかと考えられる。経済学者の何人かは，経済学の問題は将来，重要な問題ではなくなってしまうだろうと言っている。そのようになったら，経済学者は仕事をなくしてしまう可能性がある。いつまでも経済問題が重要な問題であってほしいという願望が経済学者にあったと想定することは容易に想像されるところである。

重大な戦争と顕著な人口の増加がないものと仮定すれば，経済問題は100年以内に解決されるか，あるいは少なくとも解決のめどがつくであろうということである。これは経済問題が―将来を見通すかぎり―人類の恒久的な問題ではないことを意味する。[57]

ケインズは近い将来，絶対的必要は満たされることになることを予想している。すなわち，豊かな社会の到来を予想していた。その結果として経済問題は解決されてしまう。これは経済学は重要な学問ではなくなってしまうことを意味するという。同じ指摘がハロッドによってもなされている。

人間の欲望は満たされることのないものだ，とよく言われます。しかし，満たされた状態は，思ったほど遠いことではないようです。技術が急速に進歩すれば，経済的な財が，人々が必要とするだけ（或いは，それに近く）得られるほど豊富に生産されることが可能です。「満たされることのない」欲求は，芸術上の精進というような専ら非経済的な目標へ向けられることになるでしょう。また，無限に手に入らぬ特殊なタイプの経済的な財が幾つか残ることはあるでしょう。しかし，それも，人間生活の全体的なパターンから

[57] J・M・ケインズ，宮崎義一訳，我が孫たちの経済的可能性，ケインズ全集９，東洋経済，1971，394頁。

見れば，あまり重要なことではありません。そうなれば，経済学は，重要な研究問題としての影が薄くなります。[58]

ハロッド自身は相対的必要については重視していなかった。他人と張り合っての欲望がハロッドの場合，弱かったのであろう。ケインズについても相対的必要を個人的には重視してはいなかった。しかし，社会一般はというと，絶対的必要が満たされたとしても，相対的必要から自由にはならないのではないかと考えていたのではないか。しかし，まだ貧しくて豊かな社会は実現していない。まだ生産が重要な経済である，まだ絶対的必要は満たされていない，そう考えていた，ないしそう考えたかった。それでは，豊かな社会が実現している現代社会ではどうだろうか。一般の経済学者が相対的必要に注目しないのはなぜであろう。

ロビンズ卿のように，経済学者が唯一の問題とするのは目的でも技術社会的状況でもなく，両者の関連性である，と主張することは詭弁の域をでない。それは，現行体制固有の欠陥や，まったく偏狭な短期的目的を追求することから生じてくるにちがいない浪費を隠蔽することに役立ちうるだけだからである。それにもかかわらず，この浪費がもたらす生活の質の明白な悪化にたいして，まったく無関心でいることは，経済理論が根本的な純粋性を求めるにあたって，どうしても必要不可欠なことなのである。というのは，理論経済学者は，このような問題に深くまきこまれることによって―かつてエッジワースがさまざまなコンテキストのなかで述べているように―「自らの職責を失ってしまう」おそれがでてくるからである。しかし，かれらにとって，自らの仕事を守ることよりなおいっそう重要なことは，それから必然的に導

[58] R・ハロッド，清水幾太郎訳，社会科学とは何か，岩波新書，1975，113頁。

きだされる根深い浪費や環境破壊を真剣に吟味することでおびやかされる現状の真実性なのである。[59]

このように，絶対的必要が満たされた社会すなわち相対的必要が重要になる社会は経済学者にとって失職を意味する。これは経済学者にとっては由々しきことだ。

＜厄介な問題の回避＞

経済問題が解決されてしまうと，もっと厄介な問題がそこに現われ出る可能性がある。経済的必要という刺激を奪われた人々の大部分は，豊かさを享受できない可能性がある。そしてその徴候はあちらこちらに見られるという。

経済問題が解決されるならば，人類はその伝統的な目的を奪われることになるだろう。これは，果たして恩恵となるだろうか。人生の真の価値が全面的に信じられるならば，この予想は少なくとも恩恵の可能性を開くものである。しかし数限りない世代にわたる長期間，普通の人のなかに育まれてきた習慣と本能が，わずか２，30年のうちに放棄を求められるように再調整されることを考えると，私は不安を禁じ得ない。

当世風の言葉を使えば，一般的な「神経衰弱」を予想せざるをえないのではないだろうか。われわれは，すでに私がいわんとしていることを多少とも経験している。つまりイギリスやアメリカでは，富裕な階級の妻たち，すなわち不幸な婦人たちの間ではすでにありふれたものとなっているような神経衰弱がそれである。彼女たちの多くは，その財産の故に，伝統的な努めや仕事を奪われている―彼女たちは経済的必要という刺戟を奪われると，料理や

[59] ナリンダー・シン，見野貞夫他訳，人間再生の経済，新東洋出版社，1983，136頁。

洗濯や繕い物に十分な楽しみを見出すことができないにもかかわらず，それら以上に楽しいことを見出すこともできないのである。…人生が耐えられるのは，歌うことができる人たちにとってだけであろう―そして，われわれのうちで歌うことができる者は何と少ないことだろう！

かくて人間の創造以来はじめて，人間は真に恒久的な問題―経済上の切迫した心配からの解放ををいかに利用するのか，科学と指数的成長によって獲得される余暇を賢明で快適で裕福な生活のためにどのように使えばよいのか，という問題に直面するであろう。

目的をもって金儲けに奮闘している人たちがわれわれ一同を道連れに，経済的に豊かな山ふところにまで導いてくれるかもしれない。しかしこの豊かな時代が到来したときに，その豊かさを享受することができるのは，活力を維持することができて，生活術そのものをより完璧なものに洗練し，生活手段のために自らを売り渡すことのないような国民であろう。[60]

しかし，このような厄介なことはしばらくは起こらないであろうという。いい換えるなら，豊かな社会が到来するとかえって厄介なことが起こる。それは今しばらくは起きて欲しくないという楽観的期待で締めくくる。絶対的必要がいまだ満たされないから，これまで通り欲望を満たすことに専念することで問題はないというわけである。

しかし注意して欲しい！ 以上で語ったすべてのことが実現される時にはまだ至っていないのだ。われわれは，少なくとも100年間，自分自身に対しても，どの人に対しても，公平なものは不正であり，不正なものは公平であると偽らなければならない。なぜならば，不正なものは有用であり，公平な

[60] J・M・ケインズ，宮崎義一訳，我が孫たちの経済的可能性，ケインズ全集９，東洋経済，1971，395頁。

ものは有用でないからである。貪欲や高利や警戒心は，いましばらくなおわれわれの神でなければならない。なぜならば，そのようなものだけが経済的必要というトンネルから，われわれを陽光のなかへと導いてくれることができるからである。[61]

しかし，われわれは明らかにケインズの不安は将来の不安ではないことを知っている。ケインズ自身すでに絶対的必要は部分的にではあってもすでに満たされており，したがって相対的必要が重要になっていたことを認識していたのである。この問題は明らかに厄介な問題である。この問題の解決には，これまで通用していた規範が百八十度ひっくり返ってしまうことが必要とされるからである。もはや経済学の範疇で扱えるものではない。それもあって絶対的必要はいまだ満たされていない，そう主張したのだ。明らかに事の重大性を知っていたのだが，その問題を回避したのである。

経済学者は職業上の責務から長く偽善的にふるまってきたが，J・M・ケインズ自身も，自己欺瞞ではあってもあらんかぎり真剣に主張した。ケインズは「少なくともあと百年もすれば，われわれ自身や他のすべての人びとにたいしても，公正が不正になり，不正が公正になるといわねばならないだろう。というのは，不正は有益だが，公正はそうでないからである」といった。[62]

＜絶対的必要と相対的必要の区別の困難＞

現実の問題として相対的必要が問題にならなかった原因の一つは，絶対的必要と区別するのが難しかったからである。ヴェブレンも衒示的消費と必需

---

[61] J・M・ケインズ，宮崎義一訳，我が孫たちの経済的可能性，ケインズ全集９，東洋経済，1971，399頁。
[62] ナリンダー・シン，見野貞夫他訳，人間再生の経済，新東洋出版社，1983，133頁。

品への支出とが見分けにくいことを認めている。

最初は，主として無駄なものとしてはじまる生活水準の要素が，消費者の頭の中で生活必需品となってしまうことも，しばしばおこってくる。それは，このようにして，消費者の習慣的な支出の他の項目と同じように不可欠のものとなるかもしれない。しばしば，このような部類に属しており，したがって，このような原則が当てはまる例証として用いるような品目としては，じゅうたんや敷物，銀の食卓器具，給仕人のサービス，シルク・ハット，糊のきいたシャツ，たくさんの宝石や衣装などをあげることができよう。[63]

さらに，伝統的な経済学の中に入ってしまうと，そのような区別はさらに難しくなる。伝統的経済学では欲望をあらかじめ与えられたものとする。すなわち，消費に外部性はないと想定するのである。すなわち，欲望は外部から影響を受けない。

生理的「必要」の定義にもとづいて貧乏というものを考えるならば，アメリカでは貧乏人はほとんどいないということになるから，貧困線は「必要」という言葉で定義されてきた。しかし必要という概念それ自体が，相対的に(すなわち「欲望」という言葉で）定義されてきたのである。今，ある家族がほかの家族と同じものを食べたいと望むと仮定し，またその家族は同じように効率の悪いやり方でその資源をやり繰りするのだと仮定すると，医学的にバランスのとれた食事（その内容は別として）をとるためにはどれだけの所得が必要か？ ある家族が一人あたりで，たとえば同量の熱を消費したいと仮定すると，その家族はどれだけの熱を必要とするだろうか？ しかし，

[63] ヴェブレン，小原敬士訳，有閑階級の理論，岩波書店，1999，99頁。

「必要」が「欲望」という言葉で定義された瞬間に，「必要」という概念はその具体性を失ってしまう。社会のほとんどの人々が，自分の欲しいと思うものは実際に必需品なのだと信じているときには，欲望は必需品になるのである。人々がその存在に慣れてしまったものは，そして，一般的に利用可能なものは何であれ，必需品になる。このように定義した場合，「必要」は平均所得とともに増大する。欲望が飽和することのないように，必要が飽和することもないであろう。[64]

欲望が前提となっていると，自分が欲しがっているものは必要なものになる。このように，欲望が前提とされると，すべてが絶対的必要になる。少なくとも，相対的必要は認識されにくい。

8　一度引かれたレールの上を経済学は走った

ここでは，科学が一度引かれたレールにしたがって研究されたように，経済学でも一度引かれたレールにしたがって研究されたことを示そう。そこでは顕示的消費は問われない。

伝統的経済学では，大前提として個人の選好は外部から影響を受けないと想定され，その前提の下で数多くの研究がなされた。消費の外部性がないという前提で問題を定式化されれば，そこにそのような慣習が出来上る。

理論的なレベルでは，新古典派の需要理論やそれから派生する多くの経済学的推論の根本的教義は，個人の選好形成は他人の意見や選好とは無関係であるとされ，この想定の下に，顕示的消費は，個人の消費選択に幾分影響を

[64] レスター・サロー，岸本重陳訳，ゼロ・サム社会，TBS ブリタニカ，1981，303頁。

与えたり，また人々のあいだでの需要上の変化を多少引き起こしたりしている，「嗜好と選好」という移ろいやすいガラクタ箱の中に包摂されうるとされていたと同時に，総需要も独立した個人の需要スケジュールを合計することによって基数的に計測されうるとされていた。[65]

伝統的な経済学では，生産水準の低い経済，すなわち，人々の必要性が主として生理的なものに限られる経済を分析の対象としていたのである。

ヴェブレンの主張によれば，古典派経済学が勝手に決めてかかった真理とは，せいぜいのところ，人間の必要物が，もっぱら生存に必要なものとその他のわずかなものに留まっていた，未発展で小規模な共同社会に住む個人の経済行動を説明しうる程度のものでしかない。しかし，ずっと大規模で複雑な繁栄した社会では，選択の幅が広がり，行動ははるかに複雑なものになり，一連の硬直的な分類学的解決の範囲内では辻褄が合うような説明ができなくなるのである。[66]

しかし，豊かな社会が実現し，消費者間の相互依存関係が重要になっとしても，相変わらず顕示的消費は無視され続けた。

ステータスを象徴する消費が，代表的な消費者とはいえないこのような小集団と結び付けられるかぎり，経済理論家はそれを社会的に無視し，度外視することができる。しかし，このような封じ込めや無視という政策は次第に

---

[65] ロジャー・メイソン，鈴木信雄他訳，顕示的消費の経済学，名古屋大学出版会，2000，５頁。
[66] ロジャー・メイソン，鈴木信雄他訳，顕示的消費の経済学，名古屋大学出版会，2000，84頁。

支持しがたくなってくる。というのも，金ピカ時代の大金持ちによる顕示的消費は，資金が許す範囲で社会のあらゆる階層で真似され，熱心に見習われたことを，ヴェブレンが既に立証していたからである。と同時に，自分より上の階層であると認めた人の行動を見習うという大衆のこのような「自然な」傾向は，ひたすら財とサーヴィスの売上高の増加をめざす企業社会によって，活発に奨励されていた。事はきわめて上首尾にはこんだため，世紀転換期までには，地位志向的な支出と消費は，たんに合衆国だけでなく，西ヨーロッパ中の商店や目抜き通りごく普通に目につくようになった。もはや経済学にとって，顕示的消費という「現象」が消費者需要の理論のなかで重要な位置を占めることはない，と確信をもって主張することは困難であった。[67]

このように，一度作り上げられた研究システムから脱けだすことには大きな困難がある。経済学を学ぶ者は，先輩の作り上げた体系を先ず無批判に学習しなければならないからだ。専門用語の体系を記憶しなければならない。そのようにして出来上った経済学の中で問題を考える習慣が出来上る。その結果，消費の外部性が排除された体系に疑問を抱くことはなくなってしまう。それでは，消費理論はその外部性を無視してどのような方向に展開していったのだろう。

1930年から1960年のあいだに発展を遂げた新しい消費理論は，高度に数学的になり，限界効用理論の内部にわずかながら残存していた「心理学」的なものが，もはや完全に取り除かれたということを誇るようになった。顕示的消費論は，消費者自身がますますイメージやステータスや名声などに固執するようになった時代においても，それが対人効果や相互依存的選好形成を重

[67] ロジャー・メイソン，鈴木信雄他訳，顕示的消費の経済学，名古屋大学出版会，2000，114頁。

視するゆえをもって依然として無視され続けたのである。[68]

さらに，出来上った経済学を守ろうとする保守的な姿勢が経済学者にはあった。無視することができない現象があったとしても，それが既成の経済学で説明できないとすると，それを体系の外部に放擲してしまったものと考えられる。異物感には耐えられないということであろうか。

多くの経済学者たちは，学際的な研究という理念そのものから自分たちを遠ざけて，不協和を逓減させるために，様々な戦略を行使しているように…みえる。このような戦略は，モデル構築における実証性と簡明性の哲学を重んじて，背後にあるプロセスを理解する必要性を軽視しているのかもしれない。すなわちこうした戦略は，従来の公理と矛盾するようなものは…どんな現象であれ，それを「経済学の範囲外」のものであるとみなそうとしているのかもしれない。[69]

このようなことは過去にも発生したということを指摘できる。かつて，ピグーとロビンズの間で効用の個人間比較の論争があった。ピグーは効用の個人間比較が可能であることを前提にして，所得分配の平等化を主張した。しかし，ロビンズによると効用の個人間比較には客観性がない。A の効用と B の効用を比較することは価値判断の問題が入るから，客観性を前提にしては不可能だというのである。この結果，所得分配の問題は経済学の扱うべき問題ではなくなった。経済学の外に出されたのである。所得分配という重要

---

[68] ロジャー・メイソン，鈴木信雄他訳，顕示的消費の経済学，名古屋大学出版会，2000，５頁。

[69] ロジャー・メイソン，鈴木信雄他訳，顕示的消費の経済学，名古屋大学出版会，2000，236頁。

な経済問題であるにもかかわらず，それが価値判断を含む，解決するのに厄介な問題だからということで，経済学から放擲されたのである。消費の外部性も重要な問題であることは間違いない。しかし伝統的な経済学の中では扱い難い問題である。異物は外部に放擲される。

9　目的を問わず，手段のみを問題とする社会

価値判断を回避した社会では，目的について問うことはしない。

いままでになく技術的には深い関心が向けられている。社会を批判する態度は捨て，人生の目標とされるさまざまな題目を並べるのが好きであり，何はさておいても，手段に全力を傾注する。「何が」もしくは「なぜ」の問題には興味を持たず，「いかに」の問題に注目する。…あらゆるタイプの知識人に滲透する中産階級の価値へますます妥協し，これを反映するかのごとく，彼らはいよいよ方法論に関心を寄せ，なかんずく社会測定の技術に興味を感じている。広範な社会問題の分析を進めてきた一時代前の社会科学者から見れば，若い学者はどちらかといえば問題そのものには興味を感じていない。議論するともなると，若い人たちの提出する問題は技術的な点に関するものとなってしまう。いいかえれば，「何が」もしくは「なぜ」を問うのではなく，「いかにして」を疑問とするのである。[70]

このようにして，目的が吟味されることなく，手段だけが論じられる。すなわち，「何が」，「なぜ」が問われず，「いかにして」だけを問題とすることになる。社会一般でこのような傾向が見られれば，経済学の研究分野におい

[70] W・H・ホワイト，辻村明他訳，組織のなかの人間，東京創元社，1990，113頁。

てもそのような傾向は見られるだろう。この結果，何のための消費かという問題は問われない，顕示的消費は無視され続ける。

経済学者は，重大な問題からとるにたりない娯楽に目を転じようとする。そして，このことのみが科学的な実証性を保証するものとみなされ，経済学者は，このことによって神聖不可侵な「存在」のために，非難されるべき「当為」との関連をすべて，さけて通らざるをえないのである。しかしながら，かれら特有の「存在」概念に固有なものは，現状を特徴づけ，支えるあらゆる不公平な事態にたいするまったくの冷淡ぶりなのである。[71]

存在，すなわち，目の前にある事実の分析だけが分析すべき対象であるとされ，結果として当為，価値の問題は回避されてしまう。そして，このような背景には，経済学を実証と規範に分けることができるという思い込みがある。

J・N・ケインズにしたがって，経済学を実証科学，規範科学，技術に区分する必要性を説くのである。というのは，これらの混同こそは，「多くの有害な誤謬」の源泉であるとみなされているからである。勿論，この分類方法は，うわべだけは学問の進歩を促すことに向けられている。なぜかというと，ケインズ自身もいっているように「もし，われわれが甘んじて一つのことを一度に片づけるとすれば，仕事はより完全になされ，理論的，実践的な結論はより信頼できるものとなるであろう」からである。[72]

この結果，価値と関係ない分野の研究に向かわせることになった。すなわ

[71] ナリンダー・シン，見野貞夫他訳，人間再生の経済，新東洋出版社，1983，133頁。
[72] ナリンダー・シン，見野貞夫他訳，人間再生の経済，新東洋出版社，1983，134頁。

ち，価値判断にかかわる浪費の問題，顕示的消費の問題は回避された。

だが，それが無害にみえようとも，経済学でこの「無当為性」を承認することは，とどのつまり現行体制が必然的に生みださざるをえない浪費から人の注意をそらす試みにすぎないことが判明するのである。さらに，このような浪費の捨象は，理論の次元においてのみ要請されうることであり，たしかに「技術としての経済学」の次元ではのがれうることである，といってもそれでは議論にならないであろう。[73]

シンも指摘するように，実証と規範を区別することはできない。そもそも事実として取り上げることの中に価値が前提とされているのだ。

ロビンズ卿のように，経済学者が唯一の問題とするのは目的でも技術社会的状況でもなく，両者の関連性である，と主張することは詭弁の域をでない。それは，現行体制固有の欠陥や，まったく偏狭な短期的目的を追求することから生じてくるにちがいない浪費を隠蔽することに役立ちうるだけだからである。それにもかかわらず，この浪費がもたらす生活の質の明白な悪化にたいして，まったく無関心でいることは，経済理論が根本的な純粋性を求めるにあたって，どうしても必要不可欠なことなのである。[74]

10　体制維持－目的については問われない構造

浪費を善だと見なす風潮がこの社会にはある。

---

[73] ナリンダー・シン，見野貞夫他訳，人間再生の経済，新東洋出版社，1983，134頁。
[74] ナリンダー・シン，見野貞夫他訳，人間再生の経済，新東洋出版社，1983，136頁。

たいていの経済学者は，戦後何十年にもわたって，アメリカ人がとりつかれてきた浪費の馬鹿騒ぎをはっきりと良いことだと見なしてきた。その根底には，より多いことはより良いことだという仮定があった。この見解には道理に合う部分がある。欲しい商品をより多く得ることで人の暮らし向きが今より悪くなるとは想像しにくい。追加分を無視することはいつでもできるだけになおのことそうである。こうした一片の常識に依拠することで，経済学者たちはより多くの財がより多くの満足を生み出すとか，欲望は無限であるとか，人々はそうした欲望を最大限に満足させるために行動するとかいうような，互いに直接に関連しあっている考えを擁護し続けてきた。[75]

社会全体に浪費を肯定する雰囲気がある場合，さらにそれに根拠がありそうであれば，浪費を問題視することはない。また，それが体制維持に結びつく要因であれば生きるためには，現体制を存続させるためには肯定されざるをえない。

だが，ポール・バランが辛辣に警告したように，封建制度を有利とするような立場からみれば，その体制の存続と安定に調和し，それに貢献するものはすべて本質的なものであり，生産的，合理的なものなのである。しかし，古典派経済学者は，そのことによって封建制度の浪費をみすごしはしなかった。だが，ひとたび資本主義が確立されると，それは，自らによって避けられない浪費に目をつぶるようになるのである。そして，浪費の正当化が不可能であると感ずるようになると，まさに浪費の観念そのものが許容され，否むしろつくりだされるようになり，科学の範囲外にほうむりさられてしまうのである。それにともなって，本質的な考え方は，それに詳細な注意をはらっ

[75] ジュリエット・ショアー，森岡他訳，働きすぎのアメリカ人，窓社，1995，15頁。

て構築された主要な象牙の塔からはじきだされてしまうのである。本質的なもの，非本質的なもの自体といった視点はすべて消え失せ，今後の基準は市場機構によって提供されることになる。[76]

そして，道徳的に問題であっても，正義ではなくとも，今は体制を維持しなければならない。したがって，その問題を無視しなければならないと考えたのであろう。

経済学者は職業上の責務から長く偽善的にふるまってきたが，Ｊ・Ｍ・ケインズ自身も，自己欺瞞ではあってもあらんかぎり真剣に主張した。ケインズは「少なくともあと百年もすれば，われわれ自身や他のすべての人びとにたいしても，公正が不正になり，不正が公正になるといわねばならないだろう。というのは，不正は有益だが，公正はそうでないからである」といった。[77]

11　相対的必要は満たすに値するか

われわれは，いくら水を注いでもコップがいっぱいにならないと感じている。底のどこかに穴があいているのである。[78]

すでに示してきたように，人々は相対的必要を満たそうとするが，結果としては惨めな結果に終っているといってよい。すでに明らかになっていると思われるが，確認の意味で，相対的必要は満たすことができるかどうかを検討しておこう。相対的必要は他者との関係で発生する欲望である。端的にい

---

[76] ナリンダー・シン，見野貞夫他訳，人間再生の経済，新東洋出版社，1983，150頁。
[77] ナリンダー・シン，見野貞夫他訳，人間再生の経済，新東洋出版社，1983，133頁。
[78] ポール・ワクテル，豊かさの貧困，ＴＢＳブリタニカ，1985，53頁。

えば他者に対して優っていることにより満たされる欲望である。その端的な例がハーシュの地位財である。

地位財への願望，優れた財への願望は相対的に優っているということが実現したときにはじめて叶えられる。しかし地位財の特質から，個人的には地位財を獲得できるが，全体では可能ではない。一人だけがつま先立ちをすることで，その人はよく見えるようになる。しかし，すべての人がつま先立ちをしたらどうか。結果はすべての人がコストを払って，誰もが恩恵をこうむることはない。この場合にも，上昇志向をもっていて，全体を見通す目がないと，努力不足がすなわちつま先立ちの不足に原因があると見てしまう。その結果，地位財を求めてのより激烈な競争が起こることになる。また，これまで得られた地位財でさえも，混雑が起こることでもともと持っていた望ましさを失ってしまうこともある。このように，社会全体で見ると相対的必要は満たされることはないことは明らかである。

この社会では地位財についての欲望は不健康であるとは判断されていない。しかし，上に示したように，その欲望を実現することが個人では可能でありながら，社会全体で見ると不可能であることは明瞭である。そして，社会全体で議論するかぎりこのような欲望は健康な欲望であるとは見なされない。そして飽くまでも社会を基準にして考えなければならないというのがわれわれの立場である。有利な立場にあるものだけに可能であるような欲望を満たすことに積極的な意味はない。ここで明らかなことは，この点に関しては価値判断の問題がある。価値判断を回避しようという立場からは，相対的必要が不健康であるという立場を許すことはしない。すなわち，社会全体で見たら満たせないからといって，誰かがその欲望を満たせるのだからいいのではないか，こう主張する。現状を肯定するのである。この主張の中には一見，価値判断は混入していないようである。しかし，価値判断をしていることは明らかである。価値判断の回避，体裁だけの客観性を理由にして，現状を認

めることはもはやできないのは明らかである。

ところで，満たすことに意味のない欲望として薬物中毒の例がある。これについては社会で満たすべきでない欲望，不健康な欲望だと認定されている。ところが，相対的必要には薬物中毒と似た構造があるという。

富の有用性を信じる気持がこのように永続することを説明するために心理学の領域を覗いてみると，我々が経済成長を切望して行動することが薬物中毒患者の行動とどれほど似ているかについて述べておくのもよかろう。中毒患者の「ブツ」に対する典型的な見方は，「正常になる」ためのカギとしてそれを常用することである。しかし，次の麻薬注射あるいは次の飲酒―または，次の収入倍増―をしても，またしても本当の満足は得られないのに，それが信念とか戦略とかを変えるまでには至らない。麻薬常用癖は問題を起こすだけで解決にはならなくても，「ブツ」の効能を信じる気持は続く可能性がある。[79]

中毒患者本人は，麻薬注射，飲酒によって満足を得られると信じ，それを実行する。しかし，満足は得られない。満足が得られないけれど，麻薬注射，飲酒が満足を与えてくれるという信仰はそのままである。しかし，社会的にはこのような欲望を満たすことには意味がないという合意がある。したがって，それを規制するのである。それでは，相対的必要についてはどうだろう。薬物中毒と同じ構造をしているなら，これも規制することが適切ではなかろうか。少なくとも，薬物中毒を煽るような政策を行うべきではない。

より根源的に問題を把握するために，他者に対して優ろうとする欲望を実現することの意味を考えてみよう。これは自分が他者に対して劣っていると

[79] A・B・シュムークラー，河田富司訳，選択という幻想，青土社，1997，294頁。

いうこと，他者に比べて自分が嫌いだという事実が背景にある。自分が劣っている，自分が嫌いだと感じてなければ，他者を真似し，さらに他者に優ろうとするはずがない。他者を基準にして自分を変える必要を感じるはずがない。そこで冷静に考えれば明らかなように，他者に優ろうとする努力をすること自体が他者に劣っていることを暗黙の内に証明してしまう。そして，このことはさらに自己嫌悪を，自分が劣っているという感情を増幅してしまう。

ある意味であらゆるダブル・バインドを要約し結論づけているこのダブル・バインドは，最初のダブル・バインド，すなわち自尊心と自己嫌悪とを結びつけ対置するダブル・バインドのうちにすでにふくまれていた。主体は根底的な不充足を理由に自己を軽蔑するが，しかしそれは神のように完全な自己充足が到達可能であると信じているからである。こうした狂気じみた希望のゆえに，主体は他者の実質を吸収しようとして，他者にたいして抗しがたく惹きつけられ，また頭を下げて手本＝障碍のうえに落ちてゆくのだ。手本にたいする魅惑を増大させるダブル・バインドによって，主体は自己のほうが劣っていることをその目で確認できる。耐えがたい欠如を感じとるににつけて，主体はさらにその欠如を充たしてくれるものを自己の外部にさがし求めようとするようになる。円環は閉じられて，すべてを自己に還元したいという欲望と他者にむけての逃走とが，相互に育てあうこととなる。[80]

事の始まりは自尊の欠如である。これが不充足感を生む。この不充足感は自己嫌悪を生む。そこで，他者こそは充足しているのではないかと推測し，他者のもっているものに対して欲望を感ずる。他者の持っているものを保有し，さらに他者に優るものを保有すれば，この不充足感は解消される，自己

[80] デュムシェル／デュピュイ，織田／富永訳，物の地獄，法政大学出版局，1990，90頁。

嫌悪からは自由になる，こう考える。しかし，他者に優ろうとすること自体が，自尊の欠如を意味している。こうして自尊心を満たそうとすること自体が，自尊心が満たされないでいることを証明してしまう。さらに，自尊心を傷つけ，自己嫌悪を生みだしてしまうのだ。どうにも動きのとれぬ状況に捉えられてしまう。これが馬鹿げたことであることは明らかだ。正しい解決策は，自尊の回復である。これを他者に優ろうという誤った解決策で実現しようとする。問題の解決は実現しないはずである。

12　伝統的経済学の目的は誤っている

ロビンズが示したように，経済学は稀少性を前提にして成立していた科学である。しかし，ここで明らかになったように，相対的必要を満たそうとして生産しても，相対的必要は満たされることはない。そして，生産増大の過程でさらに相対的必要に対する欲望を生みだす。相対的必要のもつ悪循環のゆえに稀少性は解消されないのである。

もし人間が技芸や産業を発明し，労働し，財を交換するとすれば，それは自分たちの欲求を満足させ，欲求の広がりと彼らが入手しうる財の量との隔たりをなくすためだ。したがって，生産水準と生産水準の向上を決定するのは，欲求である。ところが，もしより高い生産水準が人々に「自分たちは欲望しており，必要としていると感じ」させるならば，欲求の広がりを直接に決定するのは，生産された財の量だということになる。したがってわれわれは循環的な因果現象を前にしている。そこでは，欲求が必要な財の量を決定するとともに，生産された財の量が欲求を決定し，生産水準の向上が欲求の増大を招来するとともに，欲求の増大が生産水準の新たな向上を要求するのだ。

欲求によって生産が決定されるとともに，生産水準によって欲求が決定さ

れるという欲求と生産の相互決定は，入手しうる財・資源と欲望を隔てる距離の縮小は不可能であることを意味している。利用可能な財・資源の量は無限に増大することが可能だとしても，その量が直接に欲求の広がりを規定するから，稀少性の拘束はあいかわらず元のままである。稀少性はけっして消去されずに，いつまでも更新されていくのである。[81]

このような欲望を満たそうとすることに価値はない。さらにこの種の欲望を満たそうとすることは，経済以外の面で社会的な問題を起こしてしまう。

貧富の差が広がったことによる社会への影響は明らかだ。犯罪や麻薬，離婚，10代の自殺，家庭内暴力が増え，政治難民，経済難民，環境難民も増加している。武力紛争のあり方までもが変わってきた。世界中で，暴力犯罪の件数が増加の一途をたどっている。[82]

社会に欲望がある。この欲望を満たすことが目的である。この目的を実現する手段が生産物である。ところで，手段である生産物が欲望に比べて不足している。これが稀少性である。稀少性を解消するには，不足している手段である生産物を増大させればよい。それがいわゆる豊かな社会を生みだした。しかし，すでに述べたように，このような生産増大では，相対的必要は満たされることはない。さらに相対的必要は誤った欲望である。いってみれば，人間にとっての真の欲望ではない。

われわれは真実の欲求と虚偽の欲求を区別することができよう。「虚偽の」

---

[81] デュムシェル／デュピュイ，織田／富永訳，物の地獄，法政大学出版局，1990，146頁。
[82] デビッド・コーテン，西川潤監訳，グローバル経済という怪物，1997，27頁。

欲求とは，個人を抑圧することが利益になる特定の社会的勢力が，個人に対して押しつける諸欲求である。それは苦役，攻撃性，窮状および不正を永続させる欲求である。この欲求を充たすことは，個人にとって非常に楽しいかもしれない。しがしその満足が，社会全体の病弊を認識して，その病弊をなおす機会をつかむという（自他の）能力が発達することを妨げるのに役立つようなら，それは維持し保護しなければならない状態とはいえない。その場合に生じるのは，不幸のただ中における病的快感にほかならない。広告にある通りに休養し，遊び，ふるまい，消費したい，また他人が愛し，憎むものを，自分も愛し，憎みたいといった広くみられる諸欲求は，たいていこの虚偽の欲求のカテゴリーにはいる。この種の欲求は，個人が制御できない外的な力によって決定される社会的な内容と機能をもっている。言いかえれば，こうした欲求の発達と充足は他律的である。たとえこの種の欲求がどれほど個人自身の欲求に転化し，彼の生存条件によって再生産され，強められたとしても，また個人がどれほどこの欲求に自己を同一化し，それを充足することで自己を取り戻すとしても，この種の欲求はやはり当初からそうであったもの ── すなわち抑圧を必要とする勢力が支配的であるような社会の産物 ── にとどまるのである。[83]

13　むすびにかえて

われわれは科学が真の問題をとりあげない構造を指摘した。したがって，科学を標榜する経済学においても，その可能性があると考える。事実，科学は自らに目隠しをする構造があるが，伝統的な経済学においてもその事実があった。すなわち，暗黙のうちになされた欲望の肯定である。それに対する

[83] ハーバート・マルクーゼ，生松敬三訳，一次元的人間，東京河出書房新社，1974，23頁。

批判はあったが，それにもかかわらず伝統的な経済学は知識を集め続けた。そして，その知識の価値や意味は問われなかった。これに対して真に重要である消費の外部性の問題は，欲望の肯定の前に公然とは問われなかった。そこでわれわれは，欲望の問題，とりわけ相対的必要についての問題についてあからさまなかたちで問題にした。そこで得られた結論によると，相対的必要を満たすことはできないし，それを満たす意味も価値もない。しかし困難なことには，相対的必要が社会的に認められたものであって，簡単には否定できないものであることも事実だ。そこで最後の問われるべき問題は，相対的必要が必要悪として是認できるかどうかだ。

しかし注意して欲しい！ 以上で語ったすべてのことが実現される時にはまだ至っていないのだ。われわれは，少なくとも100年間，自分自身に対しても，どの人に対しても，公平なものは不正であり，不正なものは公平であると偽らなければならない。なぜならば，不正なものは有用であり，公平なものは有用でないからである。貪欲や高利や警戒心は，いましばらくなおわれわれの神でなければならない。なぜならば，そのようなものだけが経済的必要というトンネルから，われわれを陽光のなかへと導いてくれることができるからである。[84]

ケインズは今しばらくは仕方がないことだと諦め，それを受け入れている。人間であるかぎり他者と張り合うことは必然であろうか。他者に優ろうとすることは自然なことだろうか。このような欲望が正当化されるのだろうか。社会全体で考えれば満たされない構造の中で，人はただ自分の優位を見せつけるためだけに他者を排除する。いわゆるエゴイズムは仕方ないものであろ

[84] J・M・ケインズ，宮崎義一訳，我が孫たちの経済的可能性，ケインズ全集９，東洋経済，1971，399頁。

うか。経済学では，エゴイズムを正当化し，むしろそれが経済発展に寄与すると考える。それは道徳的には受け入れがたいが，今は仕方ないと諦める。しかし，われわれはそう考えない。既に指摘したように，社会全体で考えれば，相対的必要を満たすことはできない。相対的必要は基本的に地位財に対する需要である。したがって，社会全体ではこのような需要を満たすことはできないのである。さらに，相対的必要が発生する土台は，自己の喪失である，自己の蔑視である，自尊の欠如であるといってもよい。これをカモフラージュするために，相対的必要を満たそうとする。このような行動は問題を根源的に解決することにはならないし，問題の先送りであり，新たなる問題を生みだすことになるだけである。この事実を重視すべきである。事実を虚心坦懐に見つめることによって，相対的必要の呪縛から解放されると信ずる。しかし，この事実を見つめるということを可能にする環境も整っていないことは事実だ。これらの問題については次の機会に論ずることとするが，ただ方向は悲観的ではないことを指摘しておきたい。

こんにち，究極かつもっとも崇高なさまざまの価値は，ことごとく公の舞台から引きしりぞき，あるいは神秘的生活の隠された世界のなかに，あるいは人々の直接の交わりにおける人間愛のなかに，その姿を没し去っている。これは，われわれの時代，この合理化と主知化，なかんずくかの魔法からの世界解放を特徴とする時代の宿命である。[85]

マックスウエーバーの時代においてでさえ，崇高な価値は表舞台から姿を消したという。現代においては他人志向が一般的になり，そのような人間が当然とされる。このような時代では，自己の中に基準を探すことは難しい，

---

[85] マックス・ウエーバー，尾高邦雄訳，職業としての学問，岩波書店，1996，72頁。

これは事実である。しかし，歴史はただ無駄な時間を過ごしたわけではない。幾多の戦争を起こし，崇高な価値を公の舞台から消しながらも，その裏側でいくつかの重要な研究も行われている。さらに過去に示された崇高な精神の残滓はそこここにある。それらの崇高な精神や研究は相対的必要のような偽りの欲望が誤った欲望であることを確信させてくれ，さらに力強い真実の欲望をわれわれに示してくれるはずだ。われわれが，現にある誤った欲望に屈服せず，むしろ価値判断を積極的に行いながら真の欲望を発掘する努力をすれば，崇高なものはおのずと社会の表舞台に顕れる。そして，他人志向の社会であるがゆえに，相対的必要に惑わされたのだが，逆に他人志向の社会であるがゆえに，真の欲望が社会的に認定されるということが一挙に行われる可能性もある。現在，必要とされているのは，積極的に価値判断をすることである。価値相対主義こそが乗り越えられるべきだ。形だけの客観性，価値判断からの自由という幻想から解放されるべきだろう。アインシュタインにしたがって次のように言っておこう。価値判断なき科学，経済学は歪んでいる。いやしくも科学，経済学が学問の範疇に分類されうるのであれば，価値判断なき科学，経済学は学問の名に値しない。[86]

[86] アルバート・アインシュタイン，中村誠太郎他訳，晩年に想う，講談社文庫，1981。